

# 山王遺跡 12

— 山王遺跡第14次調査・第15次調査 —

2 0 2 0

福岡市教育委員会



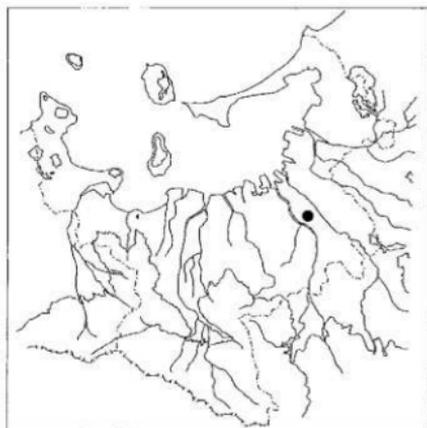






# 山王遺跡 12

— 山王遺跡第14次調査・第15次調査 —



遺跡略号	調査番号
SNN-14	1806
SNN-15	1827

2020

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う山王遺跡第14次調査、15次調査について報告するものです。調査では住居跡や井戸などが出土し、古墳時代前期を中心とした集落の一端を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、三島不動産株式会社様、株式会社川上コーポレーション様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 星子明夫

## 例 言

1. 本書は共同住宅建設にともない実施した山王遺跡第14次、第15次調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3. 検出遺構には検出順に3桁、4桁の連番号を与え、性格を示す記号としてSB(掘立柱建物柱)、SC(堅穴建物)、SE(井戸)、貯蔵穴状遺構(SU)、SD(溝)、SK(土抗)、SP(ピット)、SX(その他)を頭に付した。
4. 挿図、図版の番号は調査ごとに付した。
5. 掲載した遺物の番号は、調査ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
6. 本書に掲載した遺構図は、第14次調査を池田祐司、第15次調査を松崎友理が作成した。
7. 本書に掲載した遺物の実測図は、第14次調査を池田、萩原博文(剥片石器)、久住武雄(石製品244)、第15次調査を松崎、萩原博文(剥片石器)が作成した。
8. 本書に掲載した挿図の製図は、第14次調査を池田、萩原(剥片石器)、第15次調査を松崎、萩原(石器)が行った。
9. 本書に掲載した写真は、第14次調査は池田、第15次調査は松崎が撮影した。
10. 福岡市埋蔵文化財センターにおいて、第14次調査の土製品200の蛍光X線分析を比佐陽一郎が、鉄製品のX線撮影および錯落としを松園菜穂が行った。
11. 本書の執筆はI、IIを池田が、IIIを松崎が行った。
12. 本書の編集は松崎の協力を得て池田が行った。
13. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

遺跡名	山王遺跡	調査回数	14次	調査略号	SNN-14
調査番号	1806	分布地図図幅名	37東光寺	遺跡登録番号	2379
申請地面積	289.38㎡	調査対象面積	144.56㎡	調査面積	158㎡
調査期間	平成30(2018)年5月7日～6月21日			事前番号	29-2-937
調査地	博多区山王2丁目18番5				

遺跡名	山王遺跡	調査回数	15次	調査略号	SNN-15
調査番号	1827	分布地図図幅名	37東光寺	遺跡登録番号	2379
申請地面積	473.64㎡	調査対象面積	179.26㎡	調査面積	125㎡
調査期間	平成30(2018)年10月15日～12月26日			事前番号	30-2-69
調査地	博多区山王2丁目40番3、40番4				

# 本文目次

I	山王遺跡の立地と環境	1
II	第14次調査	3
1.	調査に至る経緯	3
2.	調査組織	3
3.	調査の記録	
(1)	調査の概要	3
(2)	竪穴建物	4
(3)	貯蔵穴状遺構	14
(4)	土坑	17
(5)	ピット	19
(6)	包含層およびその他の遺物	20
4.	おわりに	26
III	第15次調査	31
1.	調査に至る経緯	31
2.	調査組織	31
3.	調査の記録	
(1)	調査の概要	31
(2)	竪穴建物	34
(3)	井戸	37
(4)	溝	44
(5)	貯蔵穴状遺構	46
(6)	土坑	47
(7)	その他出土遺物	49
4.	おわりに	53

## 挿図目次

I	図1 山王遺跡位置図 (1/25000)	1
	図2 調査地点位置図 (1/4000)	2
	図3 調査地点位置図 (1/4000 昭和初期)	2
II	図1 調査区位置図 (1/300)	4
	図2 遺構配置図 (1/100)	5
	図3 SC005、007・008・038、009、013 実測図 (1/60)	6
	図4 SC005、007、008、009 出土遺物実測図 (1/3)	7
	図5 SC010、011、012、016 実測図 (1/60)	9
	図6 SC010、011、012、016 出土遺物実測図 (1/3)	10

図 7 SK021、SK022、SK023-SC024、SC027、SC028、SC029 実測図 (1/60) .....	12
図 8 SK021、SK022、SK023、SC024、SC028 出土遺物実測図 (1/3) .....	13
図 9 SX1027 出土遺物実測図 (1/3) .....	14
図 10 SK030、SK031、SK034、SU036 実測図 (1/40) .....	15
図 11 SK030、SK031 出土遺物実測図 (1/3) .....	15
図 12 SK034、SU036 出土遺物実測図 (1/3) .....	16
図 13 土坑実測図 (1/40) .....	18
図 14 土坑出土遺物実測図 (1/3) .....	19
図 15 SK025、1146 実測図 (1/60) .....	19
図 16 ビット群 039、040、041 実測図 (1/80) .....	20
図 17 ビット群出土遺物実測図 (1/3) .....	21
図 18 包含層ほか出土土器・土製品・鉄製品実測図 (1/3・1/2) .....	22
図 19 剥片石器実測図 1 (1/1) .....	23
図 20 剥片石器実測図 2 (2/3) .....	24
図 21 磨製石器実測図 (1/2、1/3) .....	25
Ⅲ 図 1 調査区位置図 (1/500) .....	32
図 2 遺構配置図 (1/100)・調査区西壁土層断面図 (1/80) .....	33
図 3 SC033、037、039、074、090、183 実測図 (1/40) .....	35
図 4 SC033、037、039、074、090、183 出土遺物実測図 (1/3、6のみ1/2) .....	36
図 5 SE045 実測図 (1/30) .....	37
図 6 SE045 出土遺物実測図 1 (1/3) .....	38
図 7 SE045 出土遺物実測図 2 (1/3) .....	39
図 8 SE045 出土遺物実測図 3 (1/3) .....	40
図 9 SE045 出土遺物実測図 4 (1/3) .....	41
図 10 SE007、150、154 実測図 (1/40) .....	42
図 11 SE007、150、154 出土遺物実測図 (1/3) .....	43
図 12 SD089、SU153 実測図および土層断面図 (1/60) .....	44
図 13 SD089 出土遺物実測図 (1/3、85のみ1/2) .....	45
図 14 SU153 出土遺物実測図 (1/3) .....	46
図 15 SK030、032、110、117、149、152、159、178 実測図 (1/40) .....	47
図 16 SK030、032、110、117、149、152、159 出土遺物実測図 (1/3) .....	48
図 17 その他出土遺物実測図 1 (1/3) .....	50
図 18 その他出土遺物実測図 2 (1/2、120～126は1/1) .....	51
図 19 その他出土遺物実測図 3 (1/2) .....	52
図 20 SP001 土器出土状況 (南から) .....	53
図 21 SD089 土器出土状況 (南から) .....	53
図 22 周辺の調査状況 (1/500) .....	54

## I 山王遺跡の立地と環境

福岡平野の中央部には、博多湾に向かって北西に流れる御笠川と那珂川によって形成された中位段丘面が連なる。この段丘は春日市須玖から福岡市井尻、五十川、板付、那珂等を経て比恵に達し、沖積低地とは3～20mの比高差を有する台地となり、その上には連続して遺跡が広がっている。山王遺跡はこの台地の北西端に位置する。

山王遺跡は北を沖積低地に面し、東側を御笠川によって浸食される。西側は比恵遺跡群と接し境付近には北側から浅い谷が入るが、連続する一連の遺跡である。先端には標高11m強の独立丘がそびえ、現在は山王を祀る日吉神社が置かれている。図3に示した遺跡南側の旧地形図では、6mの等高線を境に谷部に水田が入り、地形の起伏を見ることができる。比恵遺跡群との間には標高9m強の高まりがみられ、その中央部は古代官道に貫かれ切り通しとなっている。今回報告する第14、15次調査地点は南北を水田に挟まれた台地上に位置する。

周辺の遺跡には、西に接して比恵遺跡群があり、その南には一連の台地上に那珂遺跡群が続く。北西側には後背湿地を挟んで博多遺跡群が、東側は御笠川を挟んで雀居遺跡が展開する。これらの遺跡は弥生時代以降中世に至るまで奴国、那珂郡の拠点・中心とされ、それを示す遺構と豊富な遺物が出土し、とりわけ大陸・半島系の遺物が多数出土し対外交流の窓口であったことを物語っている。

山王遺跡ではこれまで15次の調査が行われ、主に弥生時代前期から古墳時代前期、古代、中世の集落を確認している。特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は図2、3で示した範囲の各調査で出土している。第14、15次調査で検出した集落遺構もこうした広がりの一部であり奴国の拠点集落の中に位置づけることができよう。

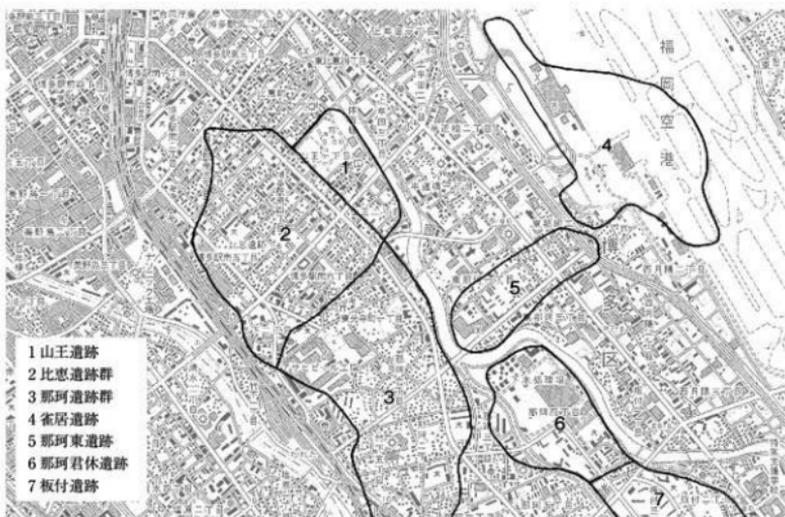


図1 山王遺跡位置図 (1/25000)



図2 調査地点位置図 (1/4000)

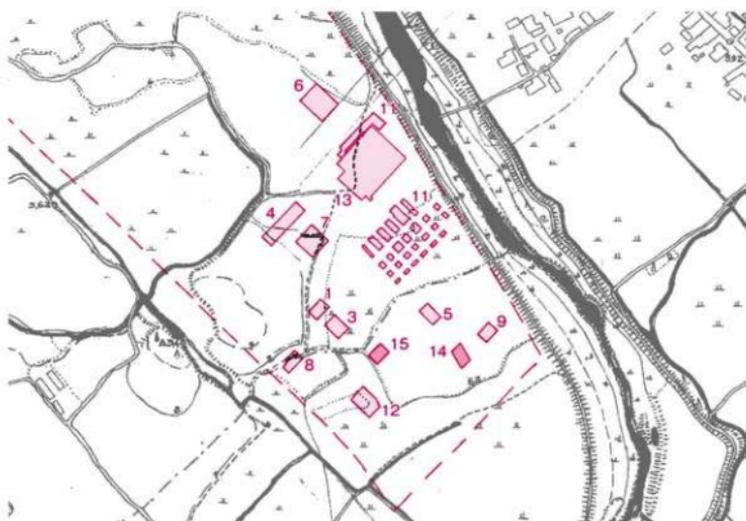


図3 調査地点位置図 (1/4000 昭和初期)

## II 第14次調査の記録

### 1. 調査に至る経緯

平成30(2018)年1月26日付けで三島不動産株式会社より福岡市教育委員会あてに、博多区山王2丁目18-5における共同住宅建設に関わる埋蔵文化財の有無の照会が提出された(29-2-937)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である山王遺跡の範囲であり、これを受けた埋蔵文化財課では申請者との協議の上3月14日に確認調査を実施し、弥生時代の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、予定建築物の構造上、工事による遺構の破壊が避けられないため、平成30年度に発掘調査、31年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで協議が成立し委託契約を締結した。申請地289.38㎡のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある144.56㎡であり、駐車場等として使用される残地については工事の影響が及ばないため現状保存している。

発掘調査は平成30(2018)年5月7日から6月21日に実施した(調査番号1806)。調査面積は158㎡で、遺物はコンテナ15箱分が出土した。

調査にあたっては三島不動産株式会社様をはじめとする関係者の皆様および近隣の方々からご理解をいただくと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝いたします。

### 2. 発掘調査の組織

調査委託 三島不動産株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 大庭康時(平成30年度)

菅波正人(令和元年度)

調査第1係長 吉武学

庶務担当 文化財活用部文化財活用課

松原加奈枝

事前審査 文化財活用部埋蔵文化財課

田上勇一郎 清金良太

調査担当 文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司

### 3. 調査の記録

#### (1) 調査の概要

対象地は北・西側は道路に面し、東・南側はブロック塀を挟んで隣地に接する。調査前の地表は道路に接する部分は路面とほぼ同レベルで、奥は20cmほど高い。北西隅で標高6.1mほどである。建物を解体したあとの更地であった。調査は敷地東寄りの建物建設部分について実施し、重機による表土除去の後、人力による遺構精査・掘削作業を行った。なお、廃土を場内処理する必要から対象地を南北に分けて土砂を反転し、南側から調査を行った。

遺構面は表土の攪乱土壌を除去した鳥栖ローム面である。全域で遺構の密度が高く、特に南側は包層または遺構の切り合いによりローム面がほとんど見られない状態であった。図7のSK021、022、

024の土層図に調査区東壁北半の土層、SC028の土層に調査区北西端の土層を示した。標高6.0～6.1mで遺構面または包含層となる。北西端では地表直下で遺構覆土となり道路下にも広がる。

遺構は竪穴建物、貯蔵穴、土坑、溝、ピットなどである。遺構覆土は暗褐色の粘質土を主とし、遺構の平面形、切り合い等の検出は困難であった。竪穴建物は弥生時代後期から古墳時代と弥生前期で一部不確かなものも含む。貯蔵穴としたもので弥生前期の1基はフラスコ状を呈し、2基が中期後半、1基は後期から古墳前期で柱穴の可能性がある。調査区の北半を中心として、大型のピットを多数検出した。南北、東西方向に方向が揃うものが多いが、建物を復元するに至らなかった。大型の建物、建物群が重なると考えられ、本調査区を特徴つける遺構である。

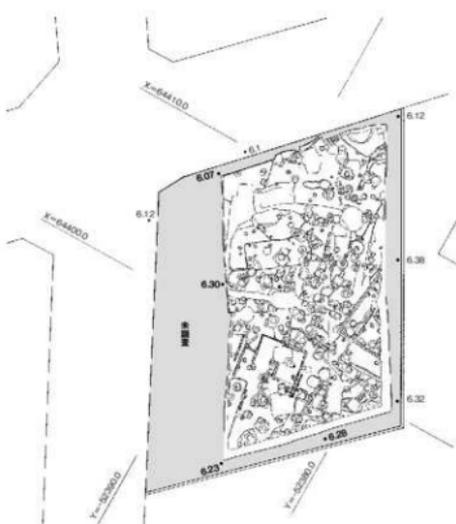


図1 調査区位置図 (1/300)

遺物は旧石器時代から中世はじめのものが出土しているが、大半は弥生土器で中期のものが多く、ただし土器は破片資料がほとんどで、遺構においても良好な出土状態を保つものはほとんどなく時期は決めがたい。竪穴遺構ではより新しい遺物の抽出を行ったが、後世の混じり込みを除去できていない。以下、遺構ごとに報告し、鉄製品、石器の図は巻末にまとめて掲載する。遺物は特に断りがない限り覆土からの出土であり、遺構に伴うものとは限らない。図2のように2m格子のグリッドを設定し、遺構名の後にグリッド名で遺構の中心付近の位置を示す。

## (2) 竪穴建物

方形または円形プランの大型の竪穴を取り上げる。焼土や側溝がなく、確認した範囲では土坑に近いものもここで取り上げた。

**SC005** (図3・4) B17 調査区南西で方形プランの一部を検出した。暗褐色土を覆土とし、深さ5～10cmが残る。図の破線より北側の覆土は黄色ブロックが混じり、西側の土層には立ち上がりが見られ、ベッドまたは別遺構であった可能性がある。東に接して側溝状の溝があるが関係は不明である。遺物は少ない。1は「く」の字口縁の甕、2、3は鋤先口縁の甕、4は器台と考えられる。このほかに須恵器小片、古式土器器様の白く薄い破片がある。床で検出したSP1003は須玖式の破片に1点の袋状口縁壺片が入る。

**SC007, 008, 038** (図3・4) D15 平面方形の竪穴で床に側溝がめぐる。SC008は全体を下げる過程で茶色かかったプランを確認した。SC010, 007を切り南側は攪乱を受ける。SC008は東西3m、南北3.1m以上を測り、深さ最大で9cmほどが残る。床面でピットを確認したが伴うものかは不明である。側溝状の溝が中央に南北、南東側に東西方向に見られるが、別の竪穴のものと考えられる。

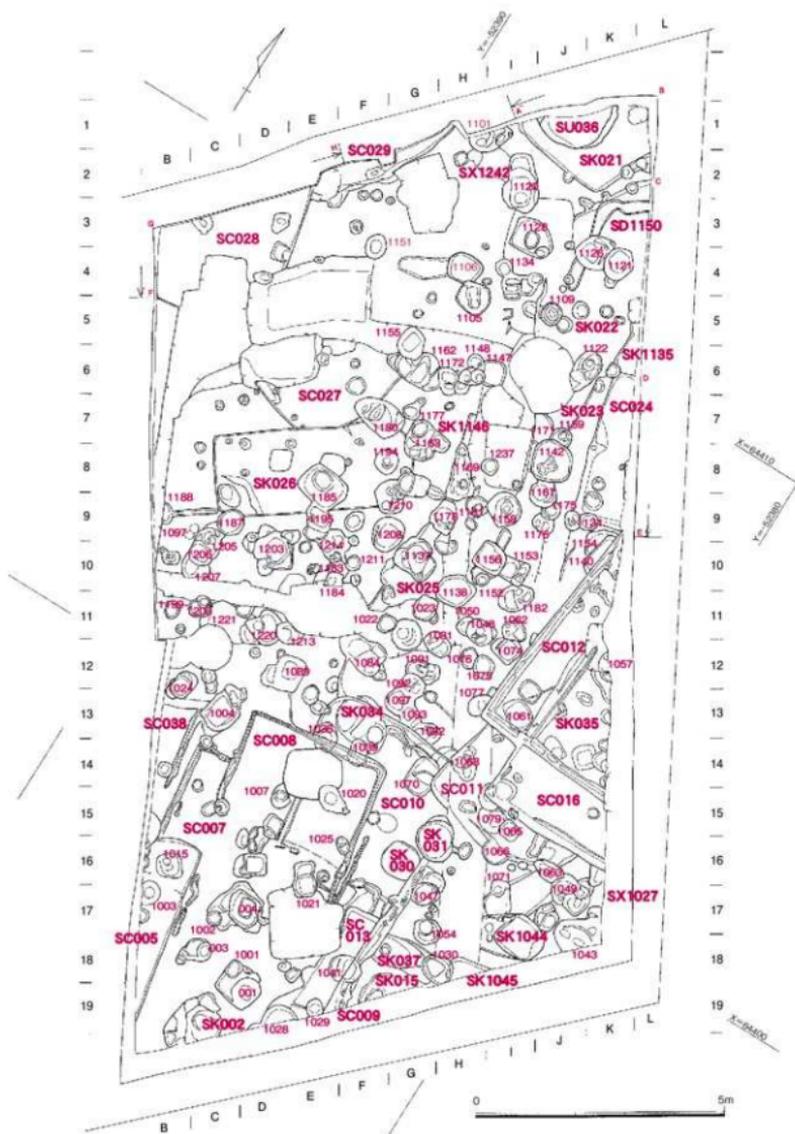


図2 遺構配置図 (1/100)

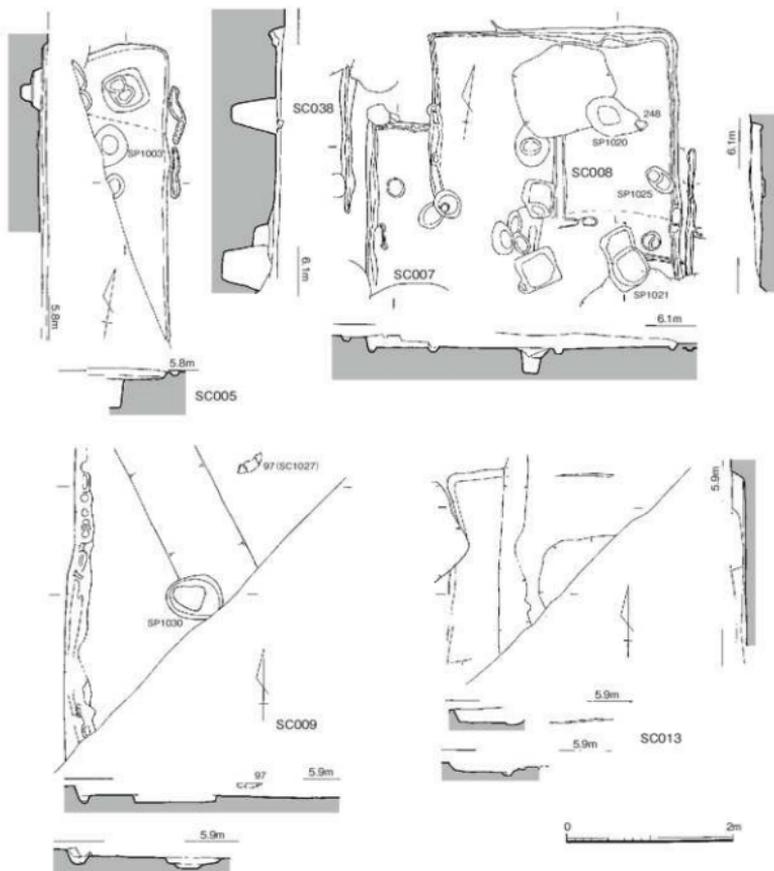


図3 SC005、007-008-038、009、013実測図 (1/60)

さらに東にも南北方向の溝をSC010の床面で確認し、側溝と平行する。SC007はSC008に切られ床のレベルはほぼ同じであるが、東西側溝を008内では確認できなかった。南北1.9m以上の規模で、深さ最大8cmが残る。SC038は溝のみの検出で、堅穴の側溝であれば東側が床と考えられる。

遺物はいずれも小片である。SC007では5は口縁が立ち上がる小片で二重口縁壺か。6は「く」の字口縁の甕、7は浅く器壁が薄い椀で1/4弱からの復元、8は大型の甕の口縁と考える。以上は古墳前期に含まれよう。9は支脚、10は鋤先口縁の甕、11,12は前期の甕、壺片である。SC008では13、

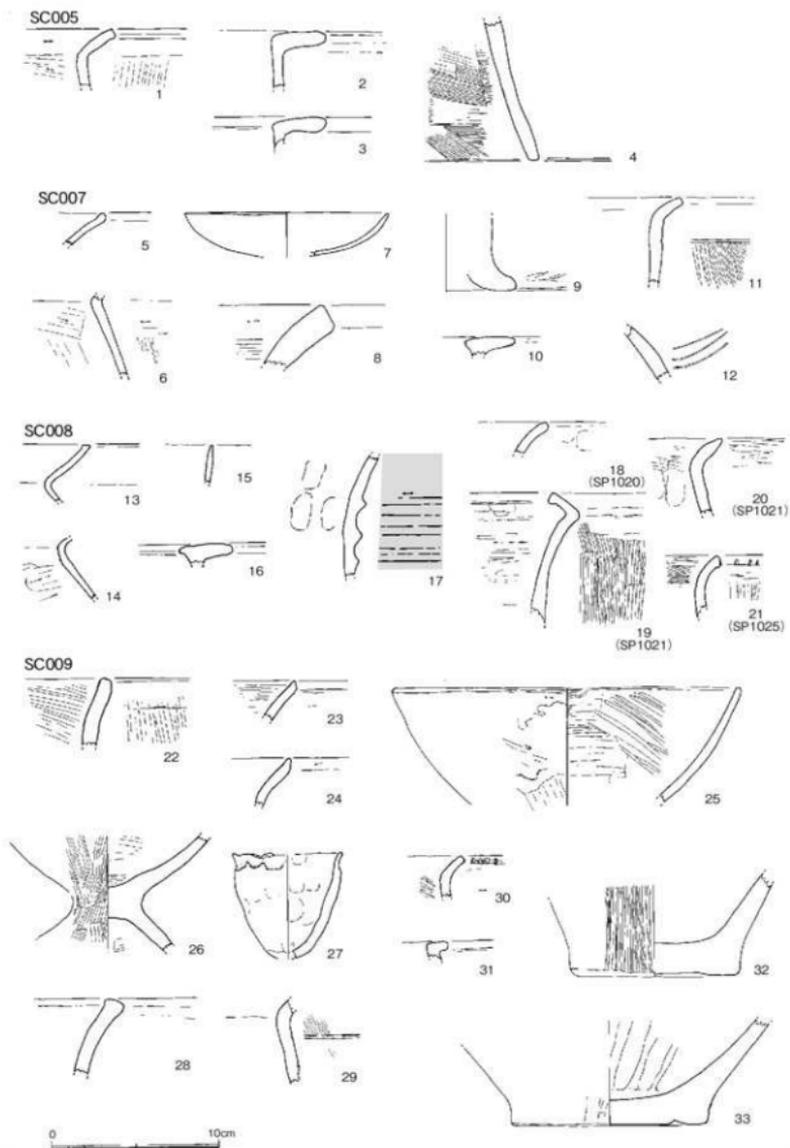


图4 SC005、007、008、009 出土遺物実測図 (1/3)

14が布留系の甕、15は直口の小片、16は鋤先口縁の甕、17は壺頸部で、全体に鋤先口縁が目立つ。北東側では砥石249が床に接して出土し、遺構に伴うと考えられる。18から21はSC008のプラン内で検出した切り合い不明のビット出土で、18は「く」の字口縁の甕、19は複合口縁の甕、20は外反する口縁の甕、21は前期の甕である。破片は弥生土器が多いが叩き、削り調整のものがみられる。038は遺物の出土はない。遺構の時期は弥生後期以降、おそらくは古墳時代初頭と考えられる。

**SC009** (図3・4) G17 調査区南側中央で南北方向のプランを確認し、試掘トレンチとの間を掘削しプランに沿った側溝を確認した。この他のプランは不明で、堅穴建物であるか明確ではない。床では別遺構と考えられるSK015、037などを検出したが切り合いは不明で、遺物が混じる可能性がある。

遺物は1ケース弱が出土した。他に比べて須玖式の破片が少ない。22から24は外反する甕の口縁部で22は内外面、23は内面に刷毛目が見られる。25の椀形土器は1/4からの復元で外面は粘土を塗るようになで、内面は刷毛目の後にへら状工具でなでる。26は脚部で鉢・甕等が乗ると考えられる。27はミニチュアの甕で内面に指頭痕が残る。28は大型土器の口縁で中期初めのものか。29から31は前期の甕、32、33は中期の甕、壺の底部である。上層から石製品244が出土している。各時期の混じりがあるが古墳時代はじめのものがみられる。

**SC013** (図3) F18 SC009に切られる堅穴で南側はプランが判然としない。009の下で北辺の延長と考えられる落ちを確認しているが、他の遺構と重なり明確に追えない。堅穴建物の可能性がある遺構としておきたい。遺物は少なく、須玖式と複合口縁片が出土している。床下で検出したSP1041からは「く」の字口縁の甕片が出土している。後期か。

**SC010** (図5・6) G15 方形の堅穴で北西隅、北壁のプランは確認したが、他はSC008、009、試掘トレンチに切られる。南北3.7m以上、東西3.25m以上の規模で深さ最大で11cmが残る。床でビットを確認したが支柱穴となりそうな位置になく、また切り合いも判然としない。中央部に径30cmほどの焼土面があり炉と考えられる。遺物はコンテナに浅く1ケースが出土した。34は小さく外反する口縁で、内面は細かな刷毛目、外面は丁寧な調整で、傾きが不明だが椀状に復元した。後期後半から古墳初期と考えられる。35、38、39は須玖式の甕で37は壺。36は外反する刷毛目調整の口縁部で後期のもの。40は壺の頸部で突帯は体部と異なる橙色の粘土を使う。全体に須玖式片が目立ち後期以降のものが1、2点みられる。ほかに石剣232が出土している。

**SC011** (図5・6) H14 平面方形の堅穴でSC012、016に切れ、南西隅をSC010の床で検出した。東側はSC1027などと重なりプランを確認できなかった。東西2.3m以上の規模で、深さは最大で9cmが残る。側溝は見られない。遺物は小片で少ない。42はわずかに内湾する口縁部、43は丸みのある底部で後期以降と考えられる。44は須玖式の甕、45は壺の頸部である。

**SC012、016** (図5・6) J13 調査区東側で検出した切り合う2棟の方形の堅穴建物で、調査区外へ広がる。切り合いの確認が困難であったが、012を016が切ると判断して掘削し、床面で012の東西方向の側溝を確認した。この側溝が016の張り床を切っているようにも見え、012が切る可能性も残る。東壁は攪乱により切り合いが観察ができなかった。016の西側壁が012と重なる部分に側溝が走るが、これは012のベッド内側のものと考えられ、図5断面i-jに見られる段のずれが016のものと考えている。k-1土層の6層は平面で幅2cmほどが壁に沿って直線的に確認できる。板等の痕跡か。**SC012**は南北4.2m以上、東西3.2m以上の規模で、西側に幅70cmほどのベッドを持ち、この部分で深さ20cmが残る。ベッドと東側の床面とは16cmほどの段差がある。確認した2辺とベッドの下端に側溝がめぐる。ベッドの北側は貼床し、北側の厚いところで7cmほどである(k-1土層11層)。下段にも貼床を行っているが016と区別できていない。張り床を剥いだローム面は凹凸がある。

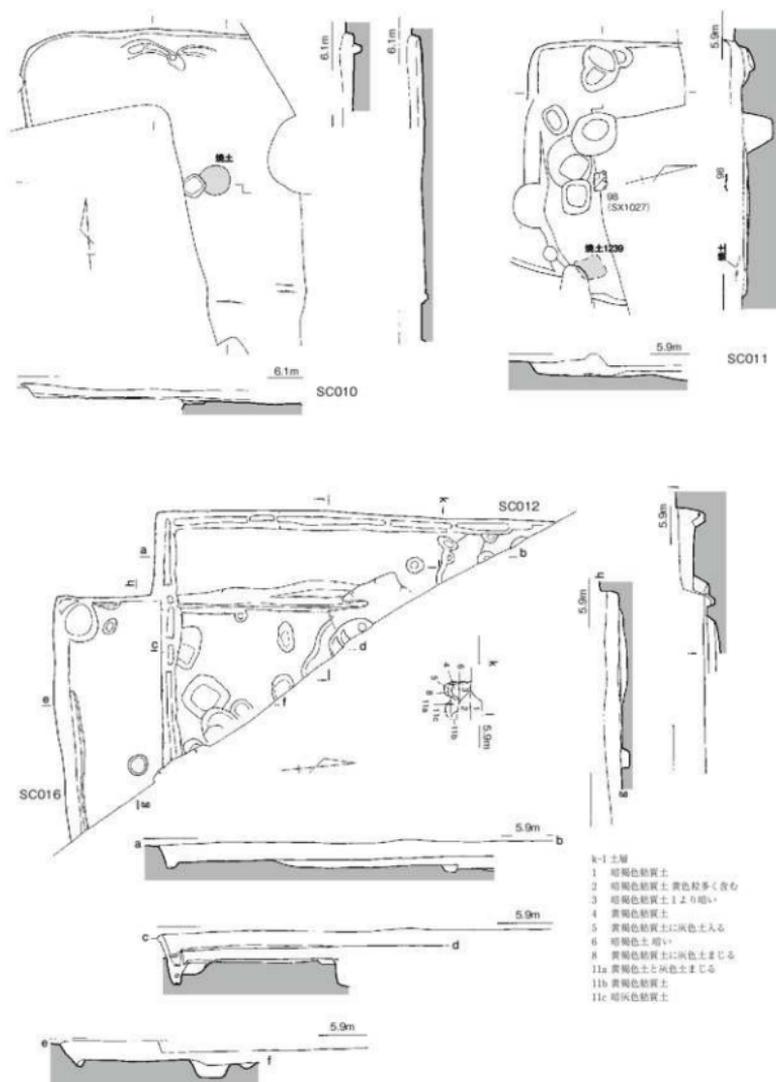


図5 SC010、011、012、016 実測図 (1/60)

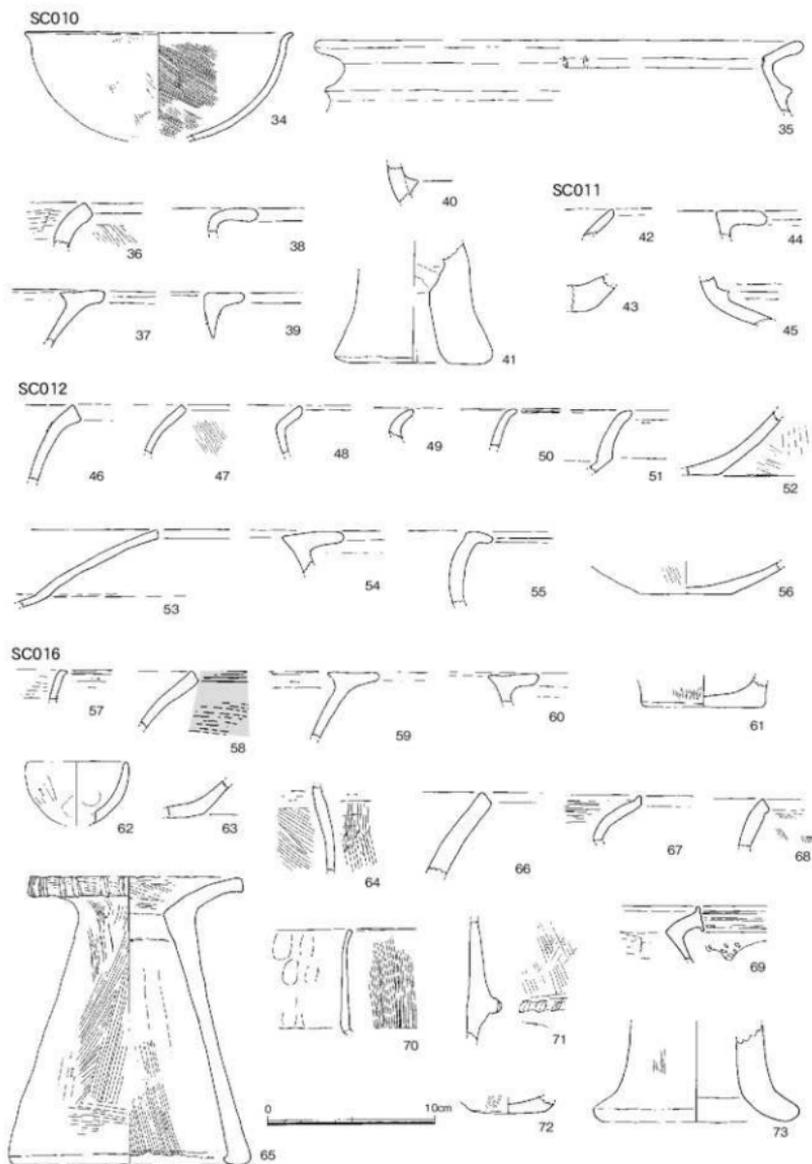


图6 SC010、011、012、016 出土遗物实测图 (1/3)

SC016は南北3.7m、東西2.9mを確認し、深さ25cmが残る。南西部では貼床が顕著で厚いところで7cmほどである。南側には一部側溝がみられるが、西側ははっきりしない。

遺物はSC016と重なりがない部分はSC012として取り上げた。他は016出土としたが、床上と貼床については重なりがない南側を分けている。両遺構とも須玖式の壺・甕が主体を占めるが、後期以降の遺物を抽出して図化した。46から56は012出土。46は大型甕、47は外反する甕で外面に刷毛目が残る。48は内湾気味の口縁、49は短く外反し横なでが顕著、50、51、53は高坏、54、55は中期の甕と壺である。52はややレンズ状を呈す底部、56は中期の壺であろう。SC016で図示したうち57から61は012と重なる部分の床直上と貼床出土で57の他は中期の破片のみである。62～65は南側の切り合いから外れた部分の出土で62～64は床上出土。62は手づくねの小型品、63は丸みを帯びた底部、64は「く」の字口縁になると考えられる。65は東壁から取り出した器台でほぼ完形品である。66から73は覆土出土である。66から68は大小の甕の口縁で67は口唇部を内面に小さく立ち上げる。69は山除系の甕で外面頭部に列点を施し、胴部内面は削りて、胎土に砂粒を含むが細かく赤みを帯びた淡橙色を呈す。70は薄手の直口壺、71は刻目突帯を施し外面刷毛目調整、72は丸みを帯びた底、73は支脚である。石製品243がSC012から出土している。両堅穴とも後期後半以降で古墳時代前期の可能性もある。

**SK021** (図7・8) K1 調査区北東端で検出した。方形プランの一端と考えられる。東西1.4m以上の規模で深さ8cmほどが残る。床は高低があり外寄りが高い。中央の床下でSU036を検出した。

遺物は少ない。74、75は小片から復元した小型の鉢形で薄手の器壁を横なでし三角突帯を付す。76、77は鋤先口縁の壺、78は未発達なL字口縁の甕、79は袋状口縁壺で外面に赤色顔料を施す。

**SK022** (図7・8) K5 SC021の南に接して弧状に深さ10cmほどの浅い立ち上がりが見られ、伴うものかは不明だが北側に幅30cm、深さ4cmほどの溝1150を検出した。遺物は80が「く」の字に近い口縁部で、81、82は鋤先口縁の小片である。83は土版として図示したが不確定である。

**SK023** (図7・8) K7 SC024の西側に直線的な浅い落ちがあり堅穴建物の可能性を残す。覆土に黄色ブロックを含み、SC024の上に広がると判断した。84、85は鋤先口縁の甕、86は内外面研磨調整で赤色顔料を施す壺または高坏、87は高坏の脚で器面は荒れる。

**SC024** (図7・8) K8 方形の堅穴建物で大部分は東側の調査区外である。SC012に切られる。南北3.2mほどの規模で、深さ30cmほどが残り床面はほぼ平坦である。西側壁は北半の上端一部がわずかに被る。遺物は少ない。88から90は須玖式の甕と壺、91は74などと同様の鉢形で小片からの復元である。92は外反する口縁で「く」の字になる可能性がある。また、床直上から鉄器208が出土している。時期は決めがたいが後期と考える。

**SC027** (図7) E7 調査区中央北西側で確認した隅丸方形または不整形の堅穴で北側は攪乱で削平され、南側、東側はSK026、大型のピットに切られる。深いところで12cmほどが残存する。中央近くに径20cm、厚さ1cmほどの焼土面、それを切る深さ10cmほどのピットがあり、伴うものとする。これを中央とすると遺構全体で3mほどの規模になる。西側の壁沿いに溝状のくぼみがみられる。遺物は出土していないが、026が中期初頭とすればそれ以前となる。

**SC028** (図7・8) C4 調査区北西隅で検出した方形の堅穴で、調査区外の西へ広がり、東側は攪乱を受ける。南北3.3m以上、東西2.8m以上の規模で深さ27cmが残る。壁際に径40cm、深さ7cmのくぼみがあり中央を中心に厚さ1cmほど固く焼け、炬と考える。これを遺構の中心とすると4mほどの規模になる。覆土は暗褐色土で他の遺構より黒い。壁溝は見られず、南側の壁はわずかに被る。東壁沿いのピットは底が東側に入る。遺物は少ない。93は中形の壺で外面は横方向に研磨し肩部に沈

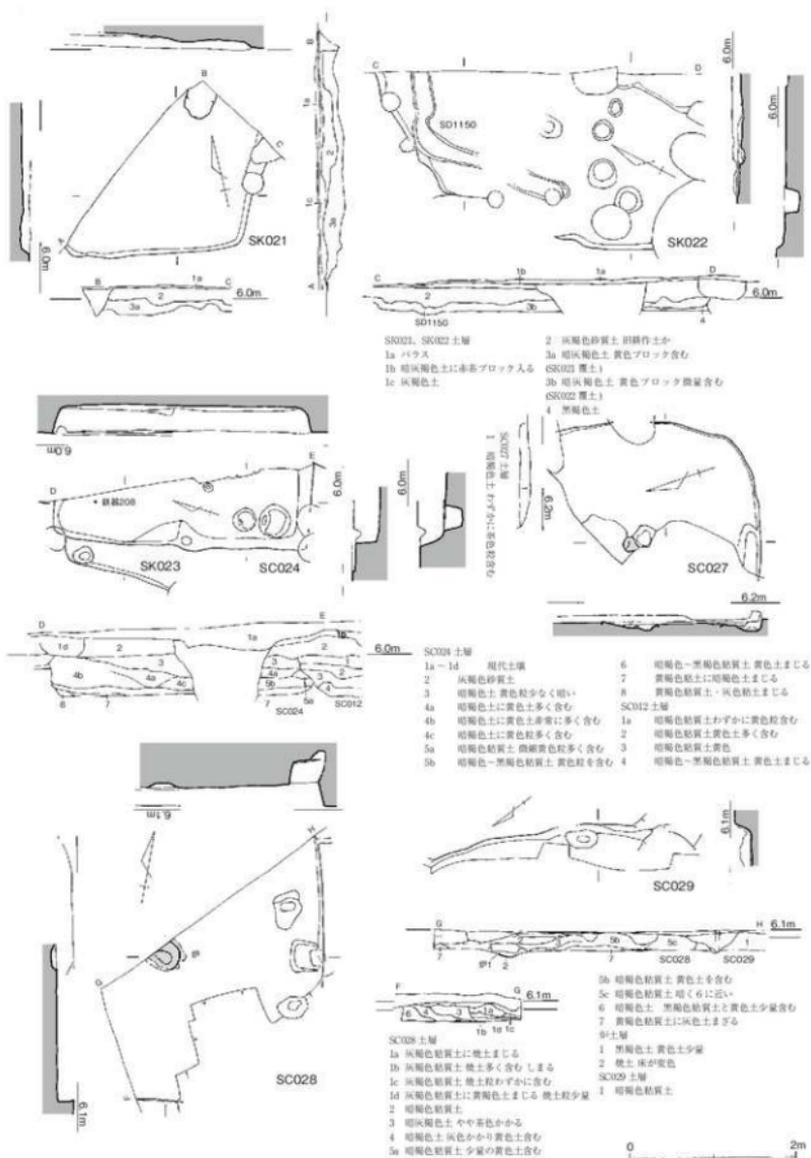


図7 SK021, SK022, SK023-SC024, SC027, SC028, SC029実測図 (1/60)

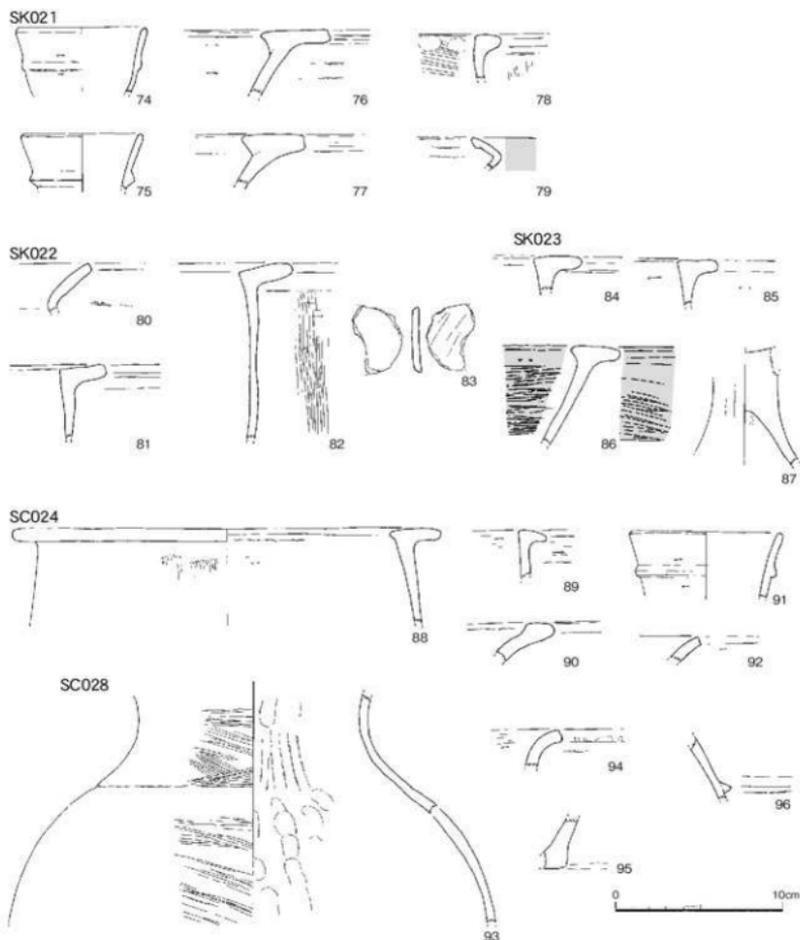


図8 SK021、SK022、SK023、SC024、SC028 出土遺物実測図 (1/3)

線を施す。内面胴部は指頭痕、頸部は絞り痕がみられる。破片をつなぎ復元作図した。94は外反口縁の裏で刻目の有無は不確か。95は底から直に立つ裏の底部。96は三角突帯を付す壺で傾きは不確か。他に目の細かな刷毛目の甕片などがある。96が中期初めの可能性があるほかは前期に収まる。

SC029 (図7) F2 調査区北西壁沿いに弧状の落ちの延長3mほどを確認した。西側は攪乱に切られる。範囲が狭くはっきりしないが円形住居の可能性があろう。深さ20cmほどである。遺物は鋤先口縁の壺片、小壺頸部、石製片248などがあるが少ない。前期または中期初めの可能性もある。

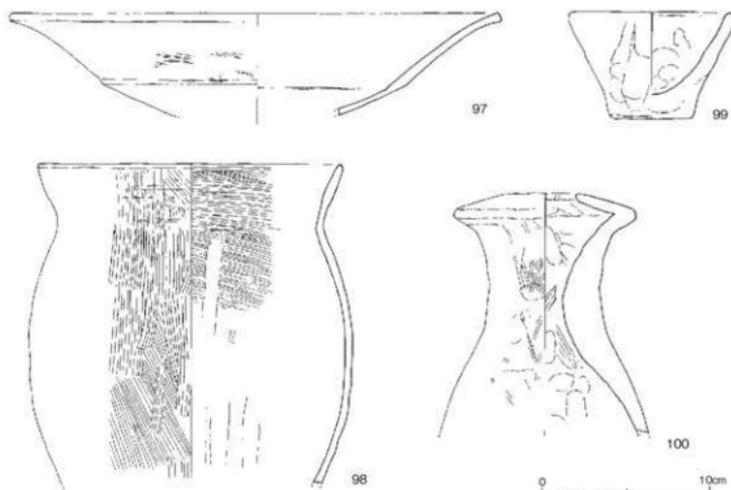


図9 SX1027 出土遺物実測図 (1/3)

**SX1027** (図9) J16 SC016の南側からSC009にかけては暗褐色土が広がり、包含層1027として順次下げ、SC011、016などの遺構を確認した。その過程で、大型の土器片、焼土面を検出し、堅穴建物のプランを確認できずに掘削した可能性がある。このため遺構番号を付しここで取り上げたが不確かである。土器97の位置を図3-SC009に、土器98と焼土面1239を図5-SC011に示した。焼土面1239は27cm大の範囲厚さ1cmが赤変する。遺物は2ケースが出土し残りが良いものを示した。97は高坏で1/4からの復元である。98は在地系の甕で、SC011上で検出した。99は指おさえ成形の小鉢、100は器台で1/2弱が残る。砥石246が出土している。

### (3) 貯蔵穴状遺構

土坑、ピット中に壁の立ち上がり強いまたは一部被るものがあり、貯蔵穴状の遺構として別に示す。典型的なフラスコ状の貯蔵穴はSU036のみで、他は大型のピットの可能性もある。

**SK030** (図10・11) G16 SC010の床で検出した。径70cmほどの方形に近い円形で壁が直に立ち、一部被り気味である。深さ35cmほどで中央へやや下がる。暗褐色土を覆土とし、堆積は自然である。遺物は中期の破片が出土し赤色顔料を施すものが目立つ。101、102は須玖式の甕で102は厚手の口縁部の上面から焼成後の穿孔2個が確認できる。103は中期の甕の底部。遺構は弥生中期後半か。

**SK031** (図10・11) H16 030の北に近接して検出した。75×95cmほどの不整形円形で深さ50cmほどが残り、壁の立ち上がりは急である。遺物は1ケース弱の破片が出土した。105、107は内外面に刷毛目を施し、107はなで消している。108は口縁部を持つ壺か。109は前期末の甕、110は前期の小壺の口縁部で内外面を赤く塗る。鉄器207が出土している。時期は終末から古墳初頭か。

**SK034** (図10・12) F13 SC010の床で検出した85×95cmの不正円形で深さ50cmを測り、北側の

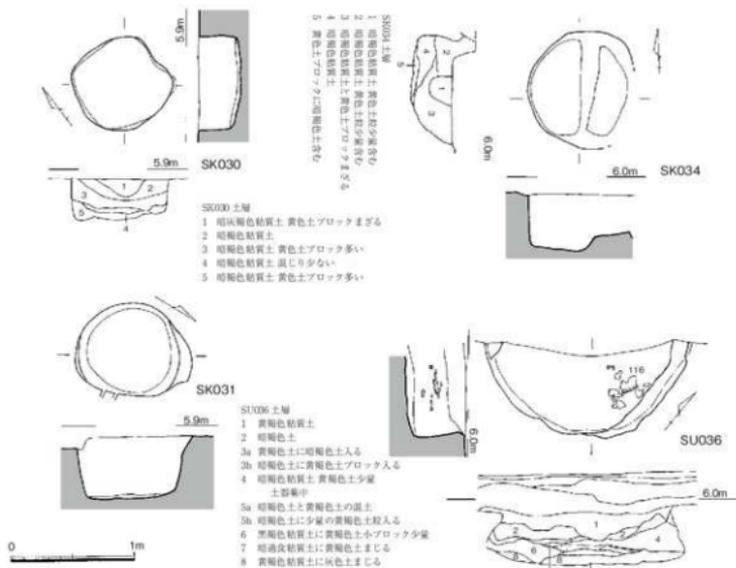


図 10 SK030、SK031、SK034、SU036 実測図 (1/40)

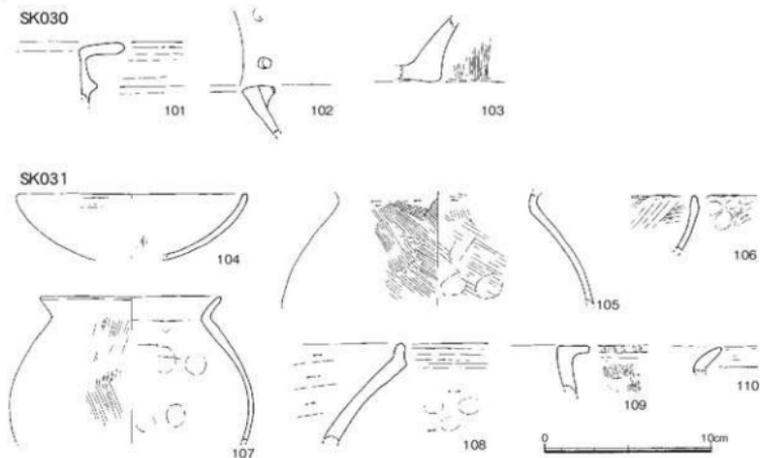


図 11 SK030、SK031 出土遺物実測図 (1/3)

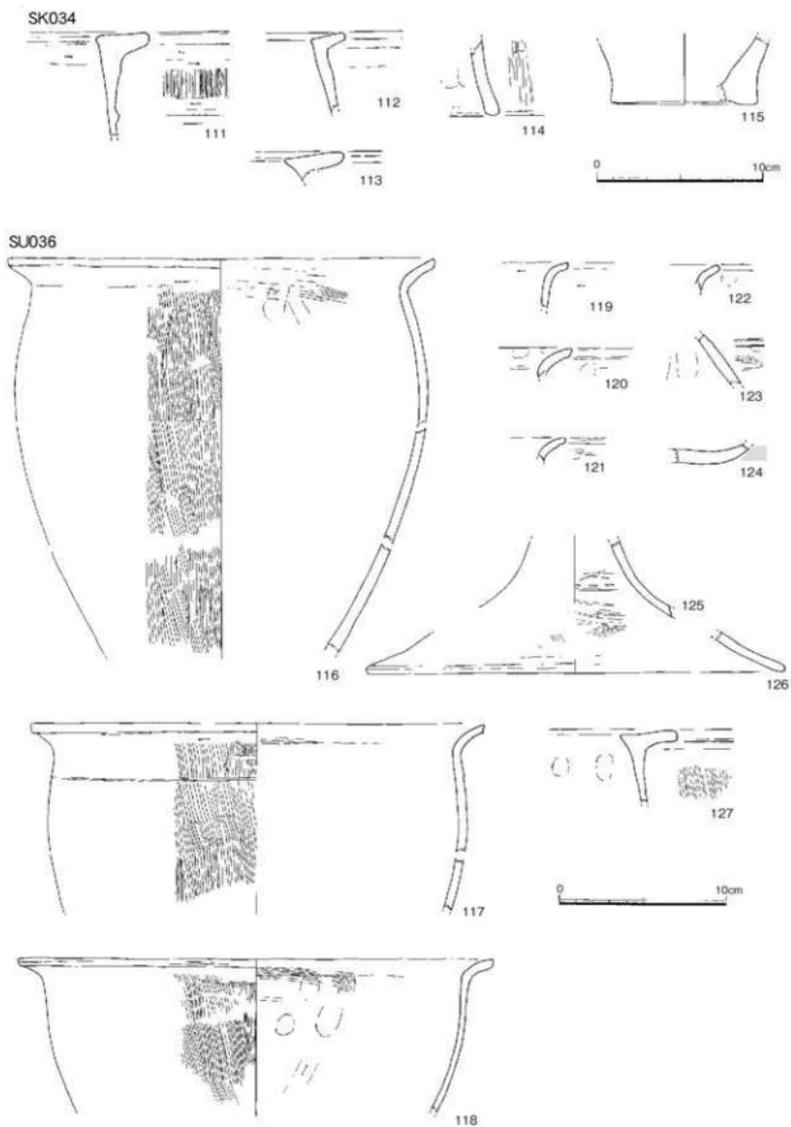


图 12 SK034、SU036 出土遗物实测图 (1/3)

壁は被る。中央に柱痕跡状が見えたが、断面から小ピットの切り合いと判断した。遺物は中期の破片が出土した。111 から 113 は鋤先口縁の甕、114 は器台片、115 は底が若干上がる。中期中頃か。

**SU036** (図 10・12) J1 SC021 の下で確認した。径 135cmほどの円形で半は調査区外に広がる。断面フラスコ状で底は径 160cmほどで深さ 47cmである。土層図 1層のように上面をローム土壌で埋めているため、当初 SK021 の床との区別がつかず、ピットを掘る過程で確認した。遺物は床から 10～20cm浮いた状態で 116 などの前期の甕などがまとまって出土し、127 以外は前期に収まる。116 は口縁部 1/4 からの復元で、胴部は同一個体から作図した。外面刷毛目調整、内面は口縁部刷毛目、胴部などである。117、118 は 1/7、1/5 からの復元。119、120 は甕、121、122 は壺または鉢の小片、123 は壺の肩部で浅い 2 本の沈線を施す。124 は丸平の底で外面を橙色に塗る。125、126 は高坏の脚としたが色調は異なり同一個体かは不明。外面は荒れ、内面横方向の研磨を施す。126 外面にはわずかに刷毛目が見られる。127 はピットの掘り方の遺物と考える。時期は板付Ⅱ式後半。

#### (4) 土坑

平面形に比べて浅い遺構などを取り上げたが、いくつかは大型ピットの底の可能性もある。

**SK002** (図 13・14) C19 120 × 95cmほどの不整形プランで北側が深く立ち上がり急である。深さ 25cmほど。複数の遺構の切り合いの可能性もある。遺物は少ない。131 は丸みを帯びた底部で内面をなで上げ、外面は斜方向の刷毛目を施す。132 は尖底の小鉢で外面を縦線状工具による調整、内面には横刷毛目が見られる。古墳時代以降。

**SK015** (図 13) F19 009 の下で検出した方形プランの一端で、深さ 8cmほどで一部が 2cmほど高い。遺物は小片が少量出土したのみで時期の判断はできない。

**SK026** (図 13・14) D8 4 × 1.75m ほどの長方形プランの土坑で深さ 10cmほどが残る。東側はピットで切られ、平面形を確認できたのは一部で、やや丸みを帯びる。床面で確認したピットもあるが伴うか不明である。覆土は黒色が強く締まりがある。北西端で小壺 133 がやや傾くが正置した状態で出土した。この遺構に伴うものと考えられる。出土遺物はケース 1/4 弱ほどで中期後半までであるが混じり込みもある。133 は前期末から中期初頭の壺で、外面は研磨を施すがやや荒めである。器壁が厚く全体に重い。口縁は横なで、2/3 弱を欠く。134 は外反し口唇部を強く横になでる。135 は面取りした口唇下端に刻目を施す。136 は三角突帯の口縁、137 は鋤先口縁の甕、138 は口縁部に焼成後の穿孔を施す。図示していないが 3cm 大の小粘土塊が 1 点ある。

**SK035** (図 13) J13 012 の床面で検出した長方形の土坑で 115 × 60cm を測る。覆土は細かなシルト状の黒色土に黄色粒を含んでよく締まり、他の遺構とは異質である。壁は直に近く隅部の成形も端正である。遺物は最上部で荒れた鋤先口縁片と小片 1 点が出土したが混じり込みと考えられる。

**SK037** (図 13・14) G18 009 の下で確認した 100 × 60cm ほどの不整形円形で深さ 30cm ほどで、床に小ピットがある。遺物は少ない。139 は土師器の甕、140 は丸底で底が厚い。古墳前期。

**SK1044** (図 13) H18 楕円形プランの土坑で東側が隅丸方形に下がる。遺構の切り合いの可能性もあろう。東側で深さ 32cm である。遺物は少なく鋤先口縁片、片刃石斧 233 が出土している。

**SK1045** (図 13) H18 長方形プランと考えられるが調査区外に広がる。深さ 20cm ほどである。遺物は少ないが 142 が薄手の鉢で後期以降と考えられる。他に鋤先口縁片がある。

**SK1135** (図 13) K6 024 に切られさらに調査区外に広がる。規模は南北 70cm 分のプランと幅 50cm 以上、深さ 5cm を確認したのみである。黒褐色の他とは異なる覆土である。遺物は 2 点のみで 1 点は鋤先口縁片 141 である。

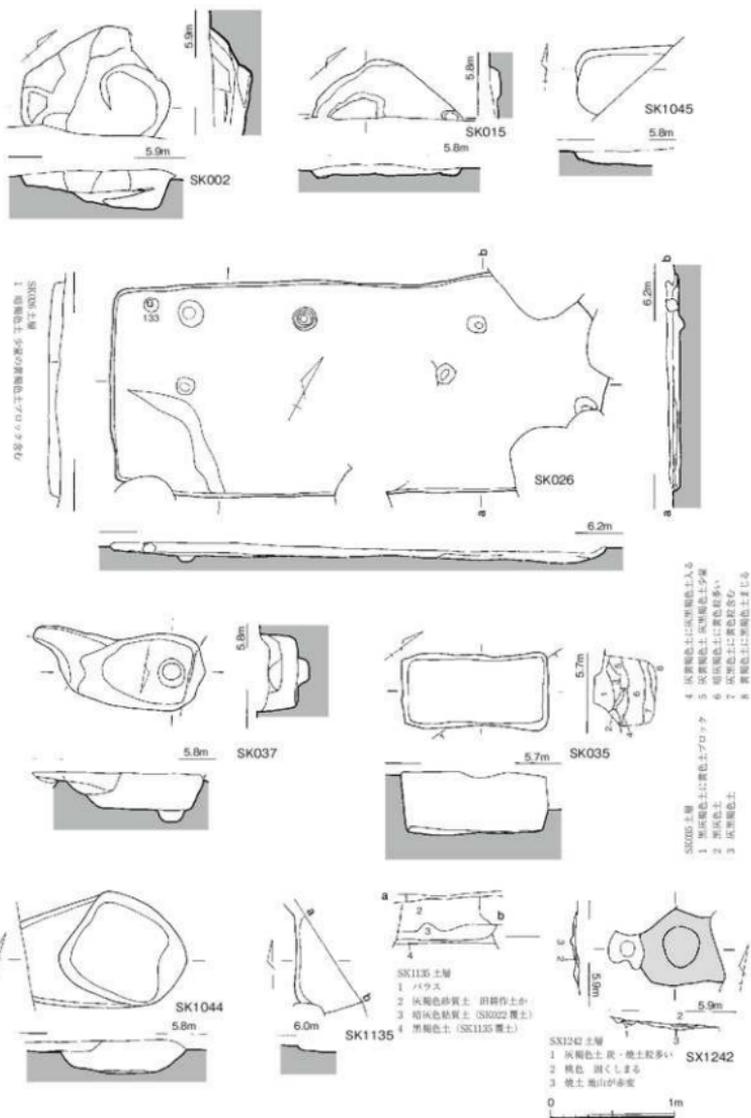


図 13 土坑実測図 (1/40)

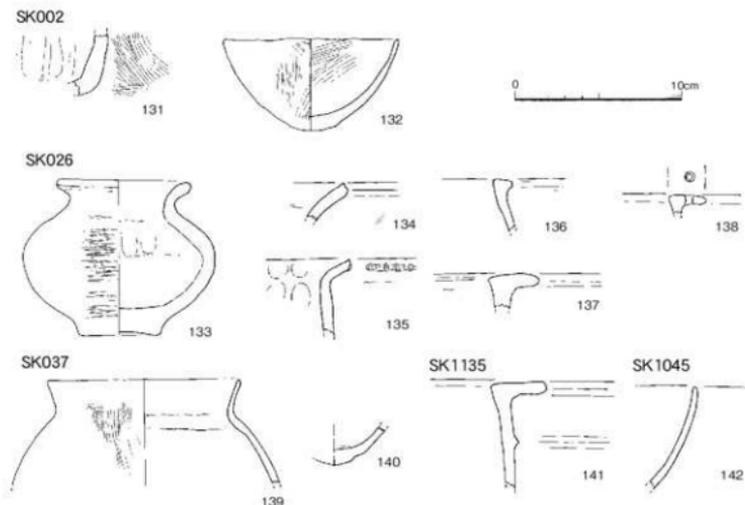


図 14 土坑出土遺物実測図 (1/3)

**SX1242** (図 13) I2 焼土の広がりで、 $60 \times 60$ cmほどの浅いくぼみの底が厚いところで2cmほど赤変する。西側には径30cmの輪状に炭化物がめぐる。堅穴建物の炉跡等か。単独で検出した。

**SK025** (図 15) G10 2.2mほどの東側への直線的な落ちを確認した。深さ18cmほどである。攪乱、ビットに切られてプランは不明である。2mほど離れた位置に焼土があり堅穴建物の可能性も検討したが想定されるプランの床高が一定にならない。少量の遺物に中期の破片がある。

**SK1146** (図 15) H7 025の北側にやや角度を変えて落ちの延長1.8mほどを確認した。攪乱で全形は不明。掘削中にSP1169を検出した。

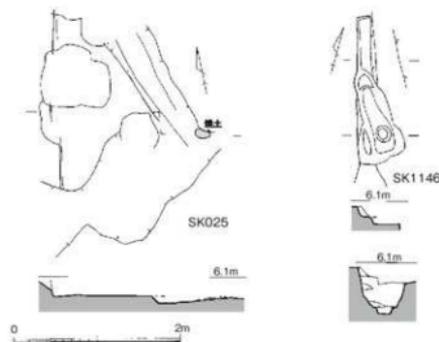


図 15 SK025、1146実測図 (1/60)

(5) ビット

60cm大を超える大型のものが多く、西側の一画を除いて全域に広がる。特にI2-B11-J18を結んだ北東側に密集し、南北、東西に並ぶようにみられるが建物等を復元できなかった。平面形は方形を意識したもの、不正円形、不整楕円形があるが割平のレベルによる違いもあろう。まとまりがありそうな並びを3例ほど図示し、他はレベル高を表(26頁)に示す。遺構の掘削にあたっては断面の観察を行ったものは2か所のみで柱痕跡の十分な検討は行っていない。遺物は須玖式の破片が多く、取り上げ

たピット出土遺物は中期から後期初頭までに収まる。切り合いは判断しづらいが、方形の竪穴建物と重なるもので建物を切ったものは確認していない。SK026についてはピットが切ると判断した。表には各ピットの遺物で最も新しい時期をわかる範囲で示した。空欄は小片で判断できないものである。ピット群039(図16・17)F7 2×2間の建物を検討したが建てきれなかった。西側のSP1162、1180、1185は規模が近く、遺物の出土が多い点が似る。159、165、175、176は器台、168は両端に窓の切れがあり筒形器台である。赤色顔料を施す。166は細かな胎土で脚としたが混じり込みか。172は口唇部をつまみ上げ、173は跳ね上げ口縁で胎土が細かい。174は小壺の口縁部か。SP1180に石器234、SP1142に241がある。

ピット群040(図16・17)H4 ほぼ等間隔で3つのピットが並ぶが深さは揃わない。遺物は須玖式の甕、壺の他180はひさご形土器と考えられる。182～184は赤色顔料を厚く施す袋状口縁の壺で同一個体か。SP1120から石器235、237、238が出土している。

ピット群041(図16・17)C11 3基を並べたが、SP1024は小さい。SP1221では柱痕跡状ピットがあったが土層断面で中位までの掘削を確認し切り合いと判断した。

SP1221(C11)から1120(I3)まで直線的で、さらに1049(J17)で開んだ東側にピットが集まる。遺物は須玖式片が多い。186は後期初頭の壺、189は天地がはっきりしないが脚と考えられる。

#### (6) 包含層およびその他の遺物

土器・土製品(図18) 遺構から遊離した遺物など、これまでの中で触れていないものなどを示す。191は口縁部に突起を持ち、焼成前の穿孔を施す土器で縄文期のものとする。192は横沈線の後に無軸の羽状文を施す壺片。193は突帯に小さな刻み目を施し前期の甕か。194は胎土が細かい小壺。195は突帯と端部に小さな刻み目を施し、上面に鋭い沈線を施す。接合のためのものか。196は金海式甕棺片、197は上げ底の厚手の底部でSP1171出土。198は刷毛目状の調整の後に横走沈線を施す

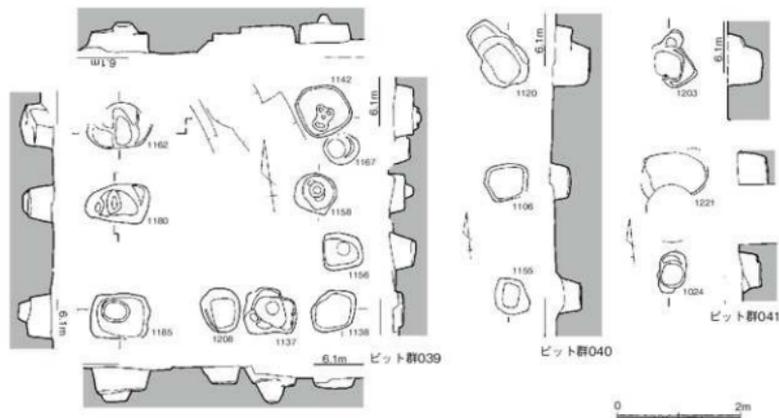
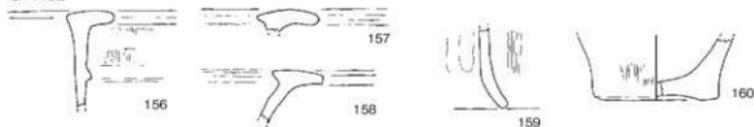


図16 ピット群039、040、041実測図(1/80)

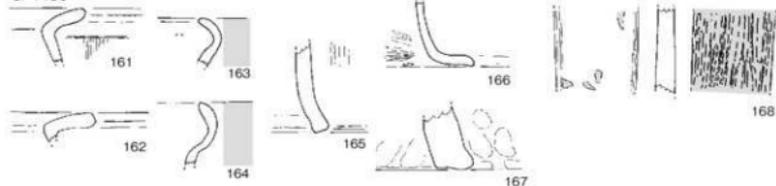
ビット群 039  
SP1142



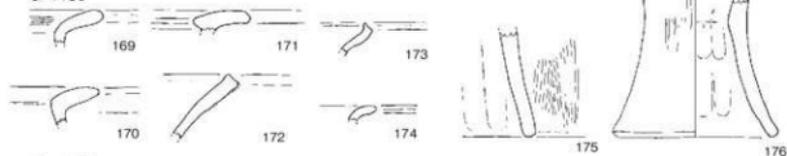
SP1162



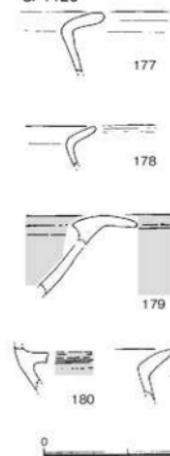
SP1180



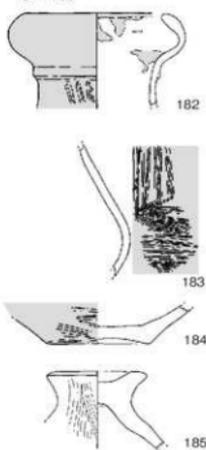
SP1185



ビット群 040  
SP1120



SP1106



ビット群 041 SP1203

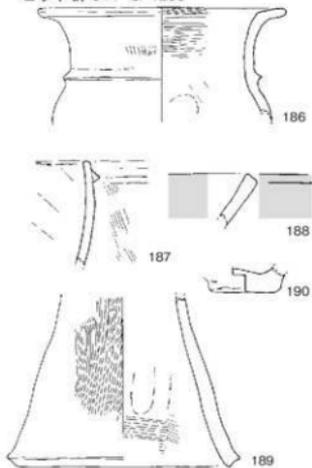


図 17 ビット群出土遺物実測図 (1/3)

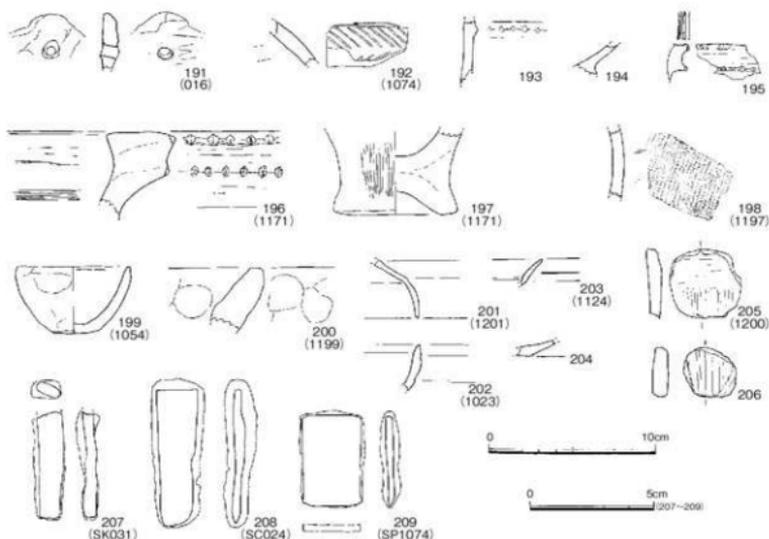


図18 包含層ほか出土土器・土製品・鉄製品実測図 (1/3・1/2)

赤焼の土器でSP1197出土。他に赤焼須恵器の小片が出土している。199は手づくねの小鉢。200は器壁が厚く指おさえて仕上げた土器片で胎土に赤色粒を含むが砂粒は含まず軽い。増場の可能性を考え使用面を2箇所、2cm程度の範囲で蛍光X線分析を行ったが金属鑄造にかかる使用の痕跡は見られなかった。器面は白色で口唇部のみ橙色を呈し、2次焼成を受けた様子はない。201、202は須恵器片、203は龍泉系青磁皿1類、204も青磁皿底部である。205、206は土版として図示したが不確定である。

鉄器(図18) いずれも錆が著しく、控えめにさびを落としX線写真を参考に図化した。207、209はメタルチェッカーに反応がある。207は幅1.2cm、厚さ6mmほどの扁平を呈し、長さ4.4cmが残る。破面の観察から断面長楕円形とみられる。208は上端が直線的で幅1.7cm、厚さ5.7cmほどで先端が刃部となる。厚さは3~5mmで図化したのが本来は2mm程度厚いと考えられる。209は扁平片刃の斧状をなす。幅2.4、長さ3.8cmを測る。出土したSP1074(112)の遺物は弥生中期から後期前半に収まる。

石器・石製品(図19~21) 図化したものは下に出土箇所を表記したが、磨製石器の一部を除いて原位置から遊離していると考えられる。

剥片石器は全体で181点が出土し、そのうち黒曜石180点、安山岩1点とはほぼ黒曜石が占める。旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の石鏃と風化が進んだ剥片があり、弥生時代の剥片まで各時期に及ぶと考えられる。211から231は剥片石器で219以外は黒曜石製である。211はナイフ形石器で器面の風化が進み左側面に調整がみられる。212は石鏃、213は細かく連続した剥離を施し石鏃未製品かとする。214、215は楔形石器で上下からの調整がみられる。215は新旧の風化面があり再利用品と考えられる。216はスクレーパーで側面に調整を施す。217~219は器面の風化がすすむ。217は折断した石刃、218は剥片、219はハリ質安山岩の石核である。220は石刃。221から226は使用痕のある剥片で側面または下部面に微細剥離がみられる。227、228は剥片で228は自然面を残す。229

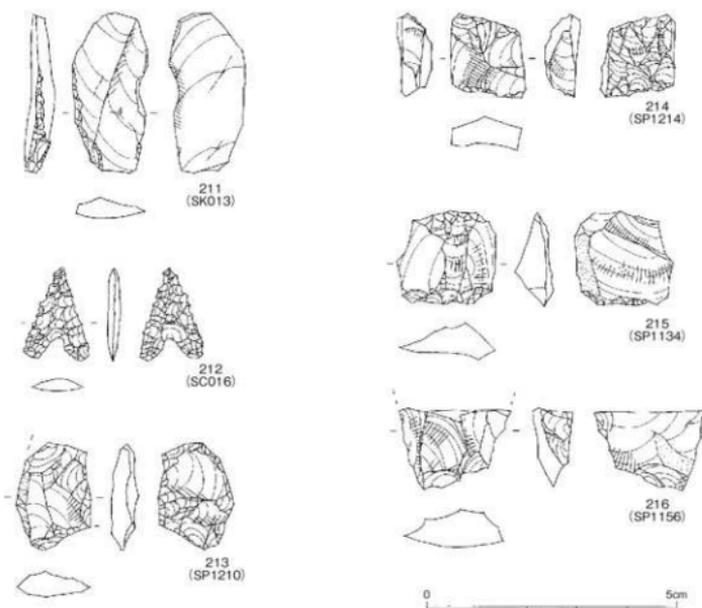


図 19 剥片石器実測図 1 (1/1)

はリタッチフレイクまたは石核で下半を欠く。器面の風化がやや進んでいる。230は石核素材で剥片剥離のために形を整えている。231は石核で自然面を打面とする。

232から249は磨製石器で図に遺構名を付していないものは包含層出土である。232は石剣の再加工品で先端、側面を潰して面取りし擦痕がみられる。233は扁平片刃石斧で先端は斜めに面取りし擦痕がみられる。灰白色の泥質岩。234、235は玄武岩製の石斧か。234は刃部の中央部が潰れ、敲打具として再利用したものか。器面は極めて滑らかである。235の器面は敲打成形の跡が浅く残る。236は黄灰色の泥質岩で擦痕がみられる表面以外は破面である。柱状石斧等か。237はやや荒めの白色の泥質岩で直に接する2面が残る。柱状石斧等か。238は板状の頁岩で図の上端が生きている可能性があるが他は破面である。石包丁等の石材として取り上げた。239は砂岩製の丸みをおびた直方体で $6.3 \times 2.8 \times 2.5\text{cm}$ 、 $60.76\text{g}$ を測る。240は紡錘車で滑石裂。241は泥岩の一面と2辺以外は破面で製品の剥片である。一つの側面は平面とは直に接する。242は泥質岩で両面が研磨または使用により平滑で破面中央部に向かって器壁が薄くなる。両側面は成形面である。243は242と同様の薄い泥質岩で表裏、側面に擦痕がみられる。244はシルト質砂岩製の板状の製品で図の一点破線より下は使用により平滑だが、他は細かく浅い敲打痕がみられる。片面には浅い縦方向を中心とした擦痕が溝状をなす。一側面を滑らかに成形し、それ以外は破面である。図の下側面は直線的で破面を成形したものと考えられる。245は図の表面以外は破面で擦痕がみられる。泥岩の砥石か。246は図の表裏と下側面が平滑で

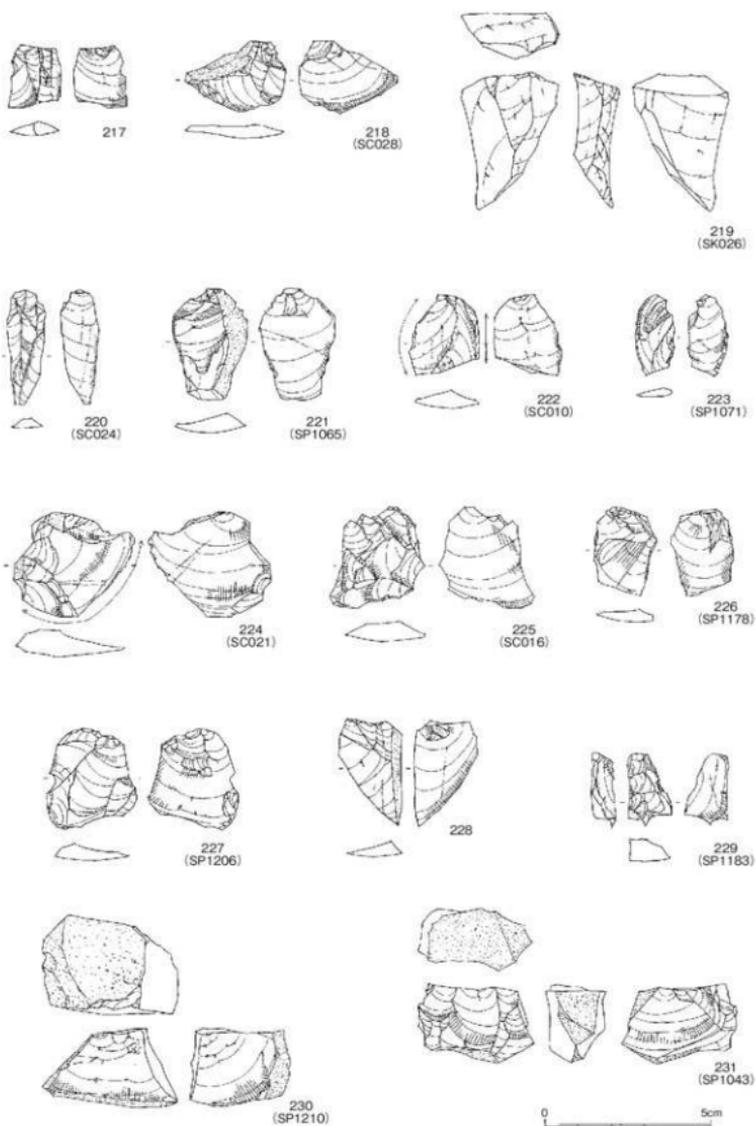


图 20 剥片石器实测图 2 (2/3)

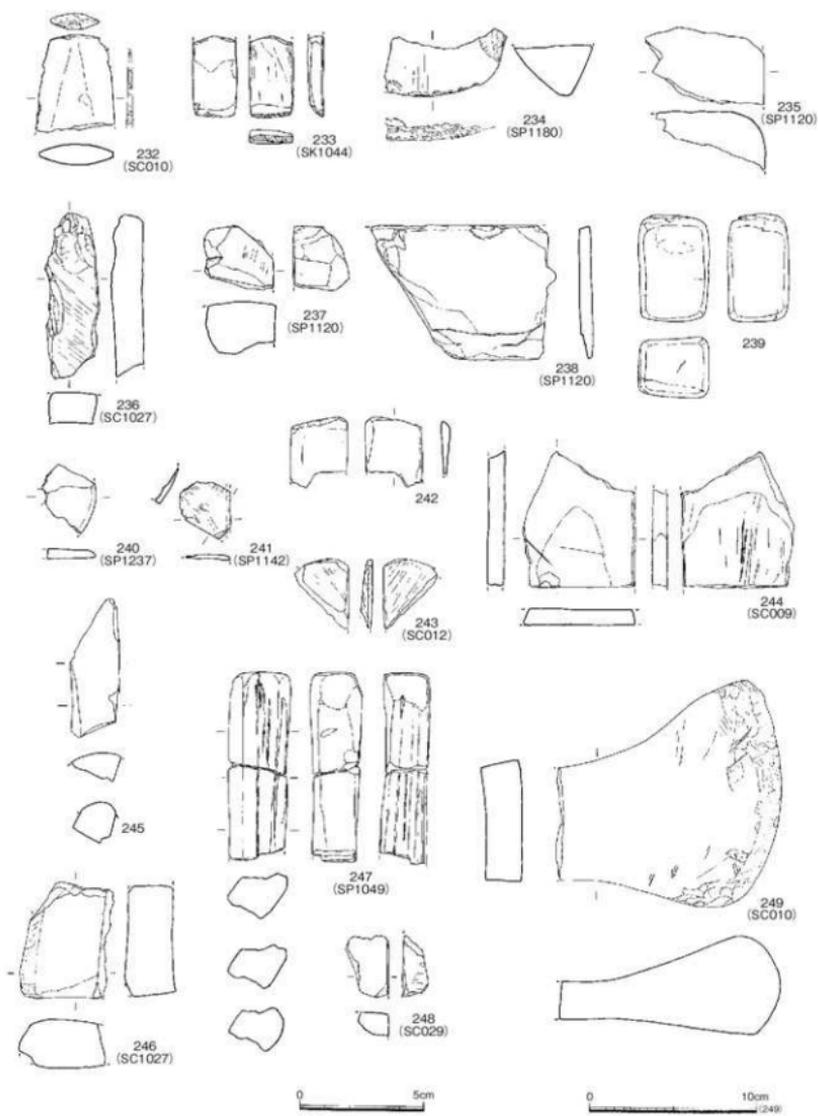


图21 磨製石器実測図 (1/2、1/3)

使用される。砂岩製の砥石か。247は細粒砂岩の砥石で4側面を使用する。特に2面は断面箱状またはM字状となり、特定の用途、製品の研ぎに使用された結果か。248は灰白色の細粒砂岩で2辺が直に接する。砥石または柱状石器等の破片であろう。249は砂岩製の砥石で4面を使用する。

#### 4. おわりに

旧石器時代から中世にかけての遺構遺物が出土した。最後に各時期について確認しておきたい。

古墳後期から中世は須恵器、陶磁器の小片が出土したのみで遺構はSK002くらいである。

堅穴建物は13基を示したが大型の土坑状も含む。明確に伴う遺物がなく時期が決めたいが、布留式系の破片がSC008で出土しており、007、009などは古墳前期にいるものと考えている。他の005、012、016なども後期後半から終末以降となろう。以上の堅穴は方向も一致している。024はやや方向を異にするが後期以降であろう。027、028が前期後半から中期初頭までで古い時期のものである。

弥生時代中期は遺物が最も多いが破片資料がほとんどで、この時期の遺構を特定しがたい。大型のビット群は中期後半に取まるものが多く、その時期の可能性はあるが不確定である。堅穴建物に切られており布留式の時期以前ではある。一定の区画に南北方向に並ぶ大型の建物、倉庫群などが想定され、山王遺跡の弥生時代集落のなかでも特徴的な遺構に位置付けられよう。

SC028、SU26から前期後半の遺物がまとまって出土し、この時期の遺構と考えられる。遺物は他の遺構からも少量だが出土する。6次調査では墓域が確認されており、各所にこの時期の居住地があるものと考えられる。中期初頭ではSP1171が遺物の混じりがなくその時期のものと思われる。東側に近接する8次調査で金海式甕棺が出土しており、遺構の広がりが想定される。

後世の遺構覆土からであるが、ナイフ形石器等の旧石器時代の遺物が出土した。近接する比恵遺跡群では例があるが、山王遺跡では報告がない。縄文期の石畿もあり、今後注意が必要である。SK035は遺物の出土はないが他の遺構と覆土が異なり、古くなる可能性がある。

各時期の集落の広がりを確認できた。今後、特に大型ビット群の位置づけが課題である。

表1 大型ビット 「標高」は遺構の底の値 (m) 時期は最も新しい土器

遺構番号	位置	標高	時期	中後：中期後半				中末：中期末											
				遺構番号	位置	標高	時期	遺構番号	位置	標高	時期								
001	D19	5.19	後期	1048	H11	5.50	中後	1091	G12	5.72		1151	F4	5.75		1183	E10	5.63	中後
004	D17	5.34		1049	J17	5.46	後期	1092	G13	5.53	中後?	1152	H10	5.64		1184	E10	5.42	
1001	C18	5.41		1054	G17	5.25		1093	G13	5.38	中後	1153	I10	5.68	中後	1185	E8	5.49	中後
1003	B17	5.30	土器部	1057	K12	5.00		1097	G13	5.63	中後	1154	K10	5.44	中後	1187	C9	5.99	中後
1004	C13	5.48	土器部	1061	I13	5.50	中後	1101	H1	5.84		1155	G5	5.53	中末	1188	B9	5.96	後期?
1007	D15	5.52	土器部	1062	I11	5.61	後期	1105	H5	5.61	後期	1156	I10	5.52	中後	1194	G8	5.60	後期?
1015	B16	5.48		1063	J16	5.48	中後	1106	H4	5.71	中末	1158	I9	5.57	中後	1195	E9	5.52	中後
1020	E15	5.30	後期	1065	I15	5.36	中後	1109	J5	5.45	中後	1159	J7	5.56	中後	1199	B11	5.83	
1021	E16	5.19	後期	1066	I16	5.62		1120	I2	5.38	中後	1162	G6	5.52	中後	1200	C11	5.76	中後
1022	G11	5.71		1068	H14	5.52	中後	1121	K4	4.90	中後	1163	G7	5.60	中後	1203	D10	5.50	中後
1023	G11	5.58		1070	G14	5.46	中後	1122	K6	4.95	中後	1167	J9	5.62	中後	1205	C9	5.46	中後
1024	B12	5.53		1071	I17	5.48	中後	1124	K9	5.57	前期	1169	H8	5.48	後期	1206	C10	5.61	中後
1025	F16	5.68	中後	1074	I12	5.32	後期	1126	K4	5.31	中後	1171	J7	5.82	中後	1207	C10	5.71	中後
1028	D19	5.14	中後	1075	H12	5.60		1128	I3	5.74		1172	H6	5.65	中後	1208	C9	5.79	中後
1029	E19	5.35		1076	H12	5.79		1134	I4	5.85		1175	J9	5.75	中後	1210	F9	5.54	中後
1030	G18	5.57		1077	H13	5.32	中後	1137	G10	5.48	後期	1176	J9	5.62	中後	1211	F10	5.80	後期
1038	E13	5.44	中後	1079	I15	5.35	中後	1138	H10	5.72	中後	1177	G7	5.60	中後	1213	D11	5.53	中後
1039	F14	5.26	後期	1081	G12	5.28	中後	1140	K10	5.62	後期	1178	H9	5.71	中末	1214	E10	5.62	後期?
1041	F18	5.37	後期	1082	G13	5.39	中後	1142	J8	5.46	中後	1180	F7	5.54	中末	1220	D11	5.34	中後
1043	J18	5.03	中後	1084	F12	5.52	中後	1147	I6	5.68	中後	1181	H9	5.48	中後	1221	C11	5.38	中後
1047	G17	5.21	後期	1089	D12	5.39	中後	1148	H6	5.74	中後	1182	I11	5.55		1237	I8	5.34	中後



(1) 調査区南半全景 北西から



(2) 調査区北半 東から



(3) 調査区北半 南から



(4) 調査区北半東側 北から



(5) SC005 東から



(6) SC009 床面検出時 東から



(7) SC007、008 南から



(8) SC007、008 西から



(9) SC010 床面検出時 南から



(10) SC016 南側 東から



(11) SC016, 012 北から



(12) SC22 南東から



(13) SC021 南東から



(14) SC024 北東から



(15) SC027 北西から



(16) SC029 北西から



(17) SC028 西から



(18) SC028 南から



(19) SK034 東から



(20) SK031 北から



(21) SU036 土層



(22) SK035 南から



(23) SK026 南東から



(24) SK026 小壺 南から



(25) 調査区北半ビット群 北から



(26) 調査区北半ビット群 南から

### Ⅲ. 第15次調査

#### 1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、株式会社川上コーポレーションより申請された福岡市博多区山王2丁目40番3、40番4における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財の有無についての照会を平成30年4月24日付で受理した。申請面積は473.64㎡、受付番号は30-2-69である。

申請地は山王遺跡の包蔵地内に位置していることから、埋蔵文化財課事前審査係は確認調査を実施し、地表面下約90～160cmで遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される179.26㎡を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は株式会社川上コーポレーションと福岡市との間で委託契約が締結され、平成30年10月15日に着手、平成30年12月26日に終了した。資料整理および報告書作成については令和元年度を行うこととなった。

#### 2 調査組織

調査委託 株式会社川上コーポレーション

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査：平成30年度 整理報告：令和元年度)

調査総括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 大庭康時(平成30年度)  
菅波正人(令和元年度)

調査第1係長 吉武学

庶務担当 文化財活用課管理調整係

松尾智仁(平成30年度)  
松原加奈枝(令和元年度)

事前審査 埋蔵文化財課

事前審査係長 本田浩二郎  
主任文化財主事 田上勇一郎

文化財主事

中尾祐太

文化財主事

朝岡俊也

調査担当 埋蔵文化財課

文化財主事

松崎友理

#### 3. 調査の記録

##### (1) 調査の概要

本調査地は山王遺跡の南西に位置する。調査地の標高は南側で約6.5m、北側で約6.3mを測り、南から北に向かって緩やかに傾斜している。調査区内は地表面から1mほど下がったところで褐色の烏栖ローム層に達した。遺構面までの基本層序は上から表土・にぶい黄褐色粘砂質土・褐色粘質土・地山である。遺構面の標高は調査区の東側で約5.5m、西側で約5.1mを測る。調査区西端の標高は30cmほど下がっており、地形の落ちと考えられる。

発掘調査は平成30年10月15日に着手した。排土を場内で処理する必要があったため、まず調査

地の東側をⅠ区として最初に調査を行い、Ⅰ区の調査終了後に反転して西側の調査を行うこととした。機材等の搬入後、15・16日に重機で表土剥ぎを行った。Ⅰ区の遺構検出面の標高は約5.4～5.5mを測る。検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物の取り上げ、周辺測量などの作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した11月8日にⅠ区的全景写真を撮影した。その後、11月16・17日に重機によるⅠ区の埋め戻しと、Ⅱ区の表土剥ぎを行った。Ⅱ区の遺構検出面の標高は約5.1～5.5mを測る。Ⅰ区と同様の作業手順で調査を行い、12月18日にⅡ区的全景写真を撮影した。その後、図化作業や遺構の写真撮影、出土遺物の洗浄作業などを行い、12月26日に重機によって埋め戻し、調査を終了した。調査の対象面積は申請面積473.64㎡のうち、179.26㎡であるが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は125㎡であった。

検出した遺構は竪穴建物跡6軒、井戸4基、溝4条、土坑、ピットである。遺構の時期は中世前半と弥生時代後期～古墳時代初頭の二時期に大きく分けられる。中世前半の主な遺構は調査区の中央を南北方向に縦断する大溝1条のほか、それに並行する溝2条、井戸1基である。大溝は幅約2.5m、深さ約0.9mを測る。11世紀後半から12世紀前半の白磁碗や瓦器碗などが出土した。弥生時代後期～古墳時代初頭の主な遺構は竪穴建物跡6軒と井戸3基である。竪穴建物跡は調査区の東側で多く検出された。いずれも全体の規模は把握できていないが、最も大きな住居で長さ3.5mを測る。井戸は3基とも底面が八女粘土層に達しており、湧水が確認された。調査区中央の井戸は直径1.2mを測り、弥生時代終末の土器がまとめて検出された。調査区全体ではコンテナケース約20箱の遺物が出土し、特筆すべき遺物として、古墳時代の直刃鎌と錐形鉄斧、滑石製小玉などが挙げられる。

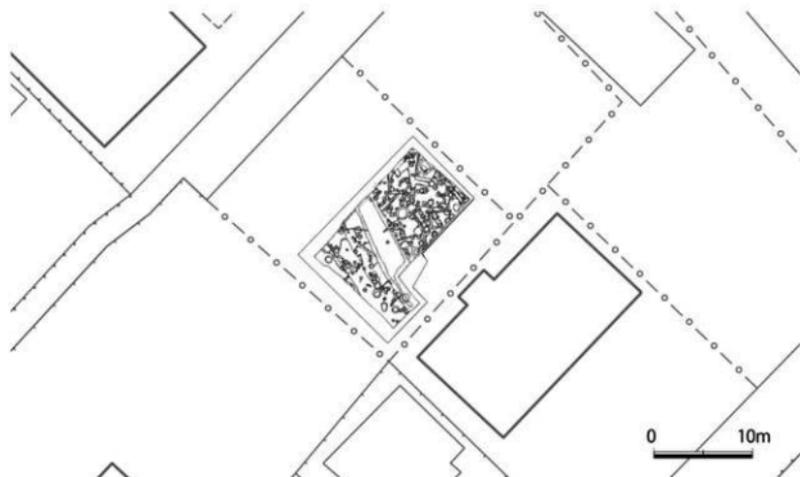
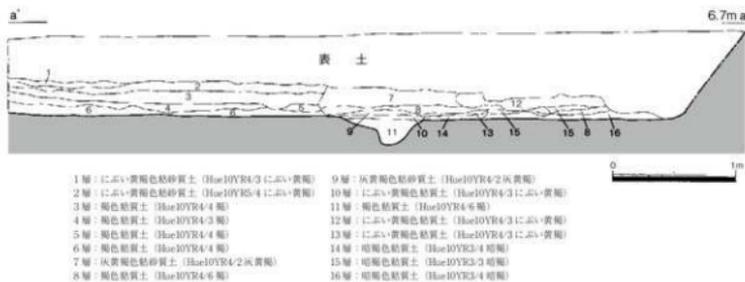


図1 調査区位置図 (1/500)



- |                                     |                                     |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1層：にぶい・黄褐色粘砂質土 (Hae10YR4/3 にぶい・黄褐色) | 9層：灰黄褐色粘砂質土 (Hae10YR4/2 灰黄褐色)       |
| 2層：にぶい・黄褐色粘砂質土 (Hae10YR5/4 にぶい・黄褐色) | 10層：にぶい・黄褐色粘質土 (Hae10YR4/3 にぶい・黄褐色) |
| 3層：褐色粘質土 (Hae10YR4/4 褐色)            | 11層：褐色粘質土 (Hae10YR4/6 褐色)           |
| 4層：褐色粘質土 (Hae10YR4/3 褐色)            | 12層：にぶい・黄褐色粘質土 (Hae10YR4/3 にぶい・黄褐色) |
| 5層：褐色粘質土 (Hae10YR4/4 褐色)            | 13層：にぶい・黄褐色粘質土 (Hae10YR4/3 にぶい・黄褐色) |
| 6層：褐色粘質土 (Hae10YR4/4 褐色)            | 14層：暗褐色粘質土 (Hae10YR3/4 暗褐色)         |
| 7層：灰黄褐色粘砂質土 (Hae10YR4/2 灰黄褐色)       | 15層：暗褐色粘質土 (Hae10YR3/3 暗褐色)         |
| 8層：褐色粘質土 (Hae10YR4/6 褐色)            | 16層：暗褐色粘質土 (Hae10YR3/4 暗褐色)         |

図2 遺構配置図 (1/100)・調査区西壁土層断面図 (1/80)

## (2) 竪穴建物 (SC)

### SC033 (図3・4)

調査区北側で検出された竪穴建物跡である。遺構の切り合いにより、北東隅を確認できていないが、長方形の平面プランを呈し、南北長2.0m以上、東西長3.5mを測る。壁高は約14cm 残存するが、壁溝は確認できなかった。遺物は弥生土器片を中心にバンケース1.5箱分出土した。出土遺物の年代から、弥生時代の建物跡と考えられる。

#### 出土遺物 (図4)

1～5は弥生土器である。1～3は甕の口縁部で、2では頸部下にハケメ痕跡が認められる。3では頸部下に断面三角形の突帯が一条巡る。4・5は甕の底部である。ともに平底を呈し、復元底径は4が約7cm、5が約10cmである。5の内外面にはわずかに丹塗の痕跡が認められる。6は花崗岩製の敲石である。表裏と側面の3面に敲打による凹みが認められる。

### SC037 (図3・4)

調査区北西側で検出された竪穴建物跡である。掘方の北側は攪乱により検出できなかった。また、南東隅は遺構の切り合いにより確認できていないが、方形の平面プランを呈し、南北長1.6m以上、東西1.4mを測る。壁高は約8cmで、西側のみ壁溝とみられる溝が検出された。主柱穴は不明である。遺物は弥生土器を中心にバンケース1/2箱分出土した。出土遺物の年代から弥生時代の建物跡と考えられる。

#### 出土遺物 (図4)

7は弥生土器の壺底部とみられ、復元底径は約8.4cmを測る。胎土に細砂粒と赤色粒を含む。

### SC039 (図3・4)

調査区北東側で検出された竪穴建物跡である。方形の平面プランを呈し、南北長1.1m、東西長1.44mを図る。壁高は約6cm残存しており、壁の内側には壁溝が巡る。主柱穴は不明である。遺物は弥生土器を中心にバンケース1/2箱分出土した。出土遺物の年代から弥生時代の建物跡と考えられる。

#### 出土遺物 (図4)

8は弥生土器の甕底部とみられる。平底を呈し、胎土には細砂粒と赤色粒を含む。

### SC074 (図3・4)

調査区北端で検出された竪穴建物跡である。遺構の中央はSE007、東側は別の遺構に切られており、全体の規模は不明である。西側の壁面には幅約8cmの壁溝が巡る。また、南側では5cmほど床面が高くっており、ベッドの可能性が考えられる。なお、主柱穴は未検出である。遺物は弥生土器片を中心にバンケース1/5箱分出土した。出土遺物の年代から、弥生時代の建物跡と考えられる。

#### 出土遺物 (図4)

9～14は弥生土器である。9・10は甕の底部で、9の外面にはハケメ痕跡がみられる。11は壺の口縁部である。12は壺の底部とみられ、平底を呈する。13・14は高坏で、13には部分的に丹塗の痕跡が認められる。

### SC090 (図3・4)

調査区中央で検出された竪穴建物跡である。西側はSD089に切れ、南側は調査区外に続くため、全体の規模は不明である。検出できた壁面には幅6～12cmの壁溝が巡る。SD089に切られた西端の床面では一部焼土が検出された。主柱穴は不明である。遺物が弥生土器を中心にバンケース1.5箱分出土した。出土遺物の年代から、弥生時代の建物跡と考えられる。

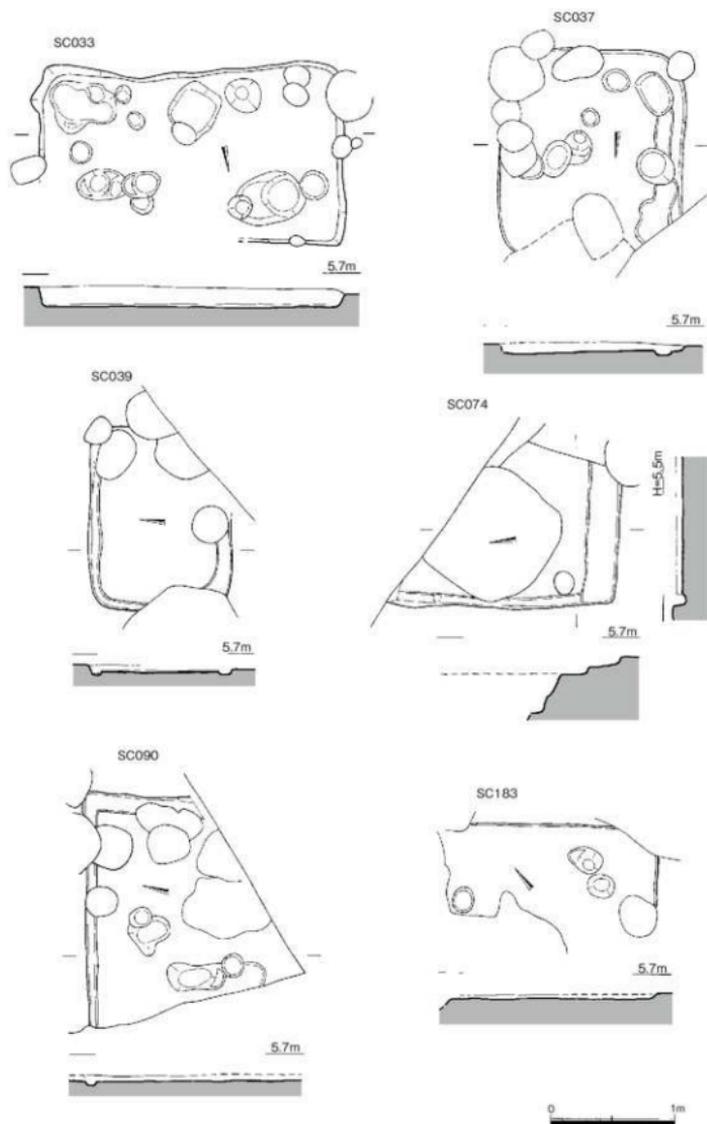


图3 SC033、037、039、074、090、183实测图 (1/40)

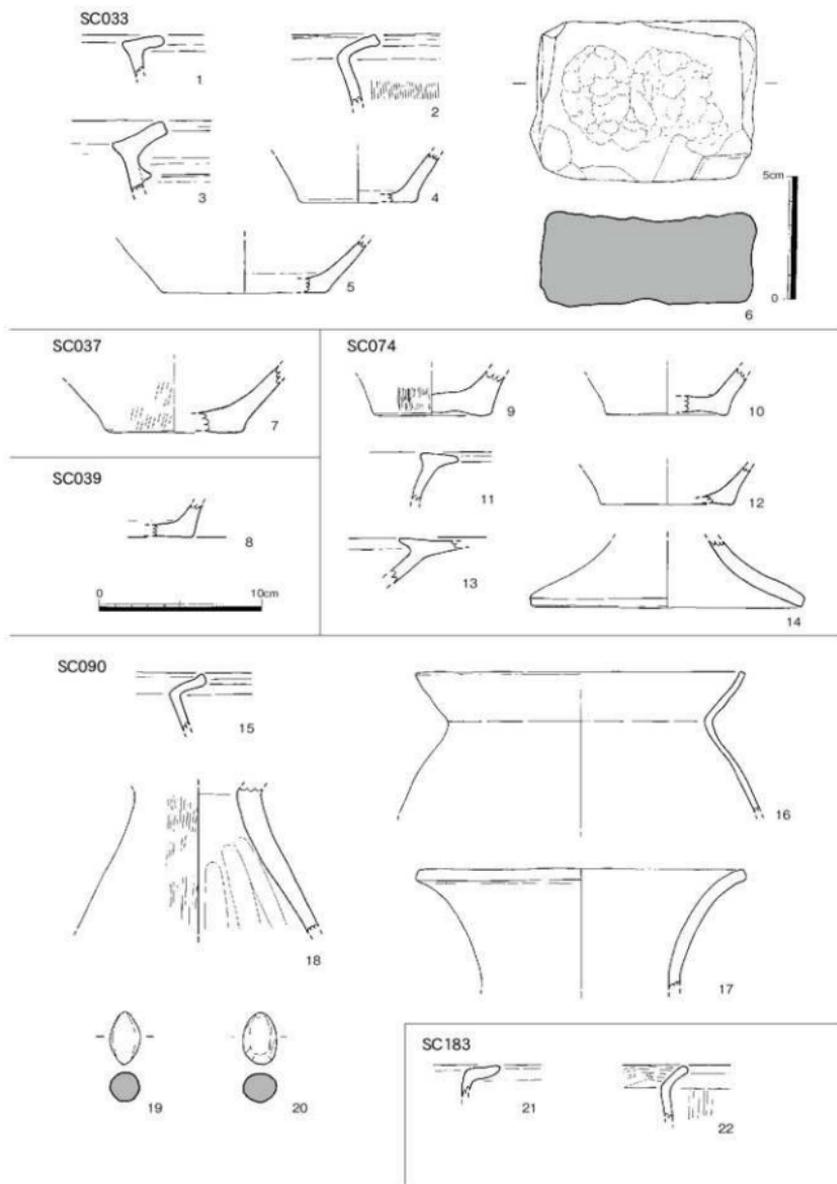


図4 SC033、037、039、074、090、183 出土遺物実測図 (1/3、6のみ1/2)

#### 出土遺物 (図4)

15・16は弥生土器の甕である。16の復元口径は約20.0cmで、色調は橙色を呈する。17は壺の口縁部で、胎土には砂粒を多く含む。18は高坏の脚部で、外面にはハケメ、内面にはナデツケ痕跡がみられる。19・20は土製の投弾である。

#### SC183 (図3・4)

調査区南側で検出された竪穴建物跡である。深さは2cmほどと浅く、検出できたのは北壁と東壁の一部であり、北壁はSD089とSK178に切られる。全体の規模は不明であるが、方形の平面プランを呈する。壁溝および支柱穴は検出されなかった。遺物は弥生土器を中心にパンケース・パンケース1/2箱分出土した。出土遺物の年代から、弥生時代の建物跡と考えられる。

#### 出土遺物 (図4)

21・22は弥生土器の甕口縁部である。22は内外面にハケメ痕跡が認められる。

#### (3) 井戸 (SE)

#### SE045 (図5～9)

調査区の中央で検出された井戸で、掘方の平面プランは直径約1.3mの円形を呈する。深さは約1.8mで、底面は八女粘土層に達する。掘方の東側では底面から約0.9mの高さにステップ状の掘方が認められる。SE045では多量の弥生土器が出土したが、その多くは標高4.9～4.6mの地点に集中していた。その出土状況から、井戸がある程度埋まった段階で一括廃棄したものと推定される。出土遺物の年代から弥生時代後期後半～終末の井戸と推定される。

#### 出土遺物 (図6～9)

23～31は弥生土器の甕である。23は口径約32.0cm、器高40.5cmで、口縁部には板の小口で斜め方向の刻み目がつけられている。24は口径約22.0cmを測る。内外面にはハケメ痕跡が明瞭に認められ、口縁部外面には工具痕跡がみられる。25は口径約23.4cmを測る。胴部は長胴化し、内外面ともにタテハケメ調整がみられる。26は口径約26.6cmを測る。胴部以下は欠損しているものの、25と同様に長胴化の傾向がみられる。27は口径約25.2cmを測る。外面にタテハケメ、内面にヨコハケメの調整がみられ、頸部内面に指頭痕が残る。28は底部片である。やや凸レンズ状を呈し、底径は約4.5cmを測る。

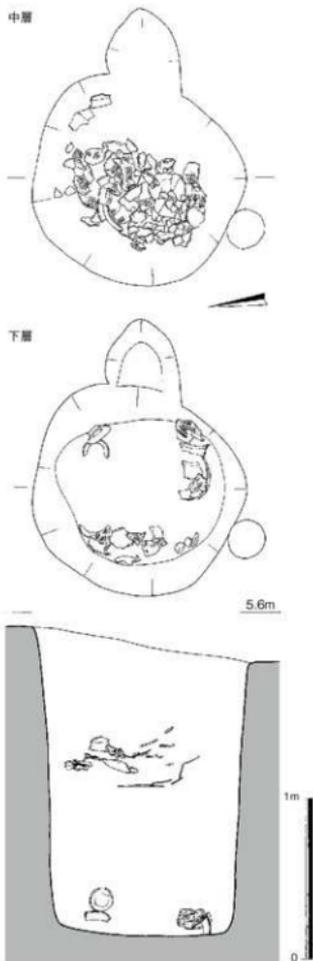


図5 SE045実測図 (1/30)

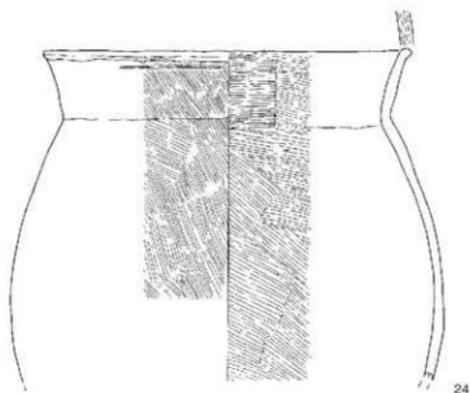
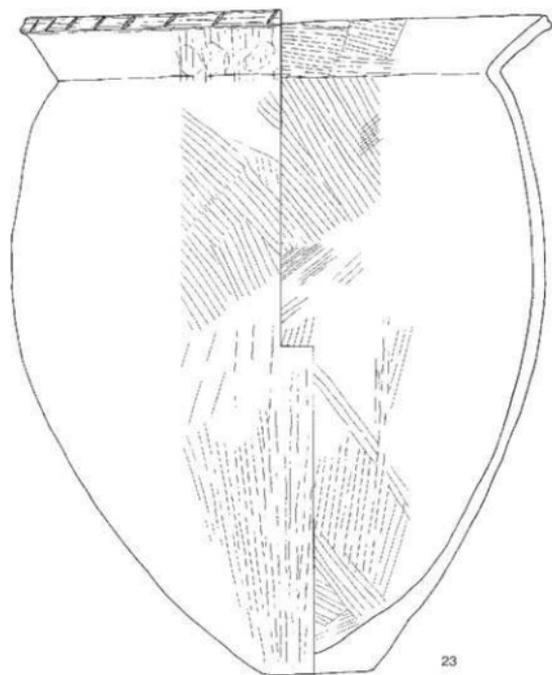


图6 SE045 出土遺物実測図1 (1/3)

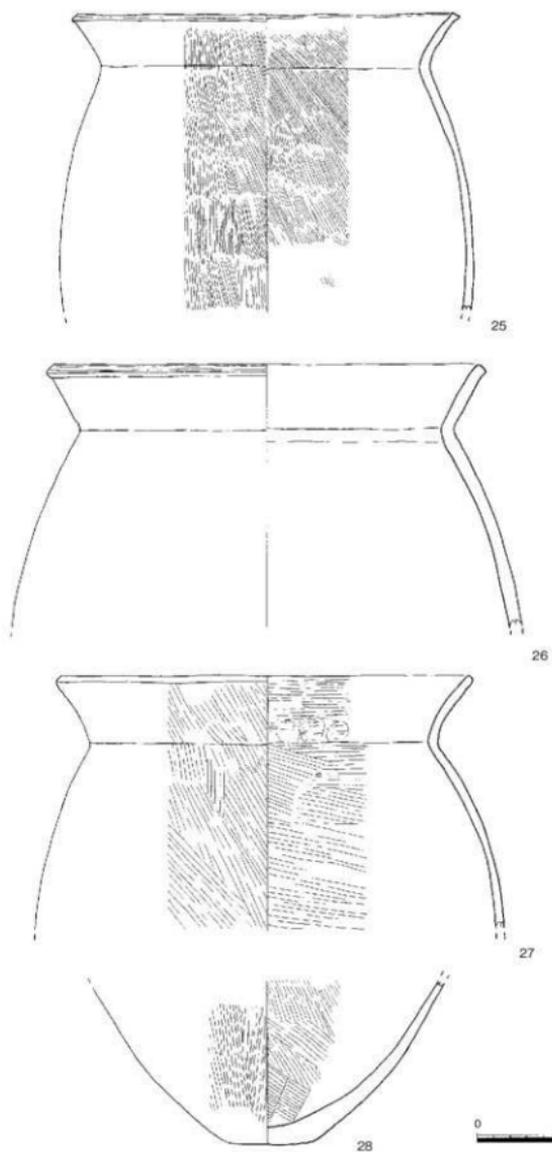


图7 SE045 出土遺物実測図2 (1/3)

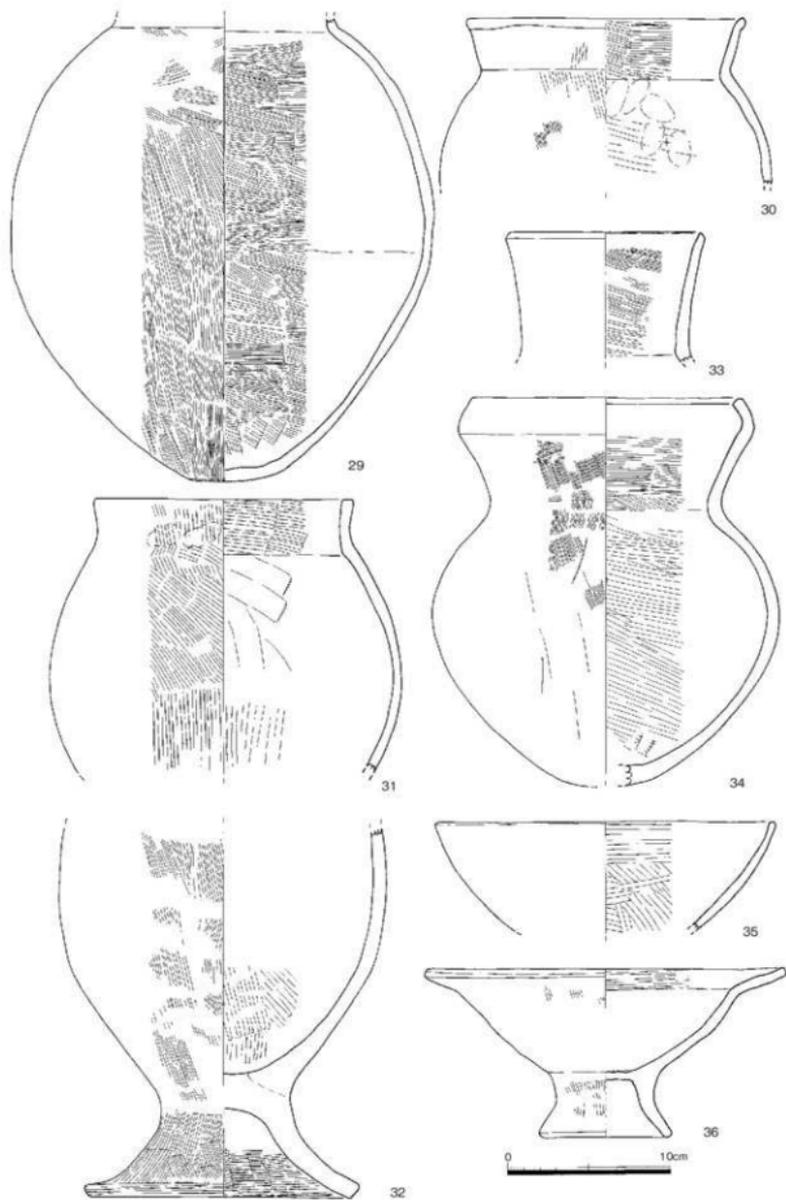


图8 SE045 出土遺物実測図3 (1/3)

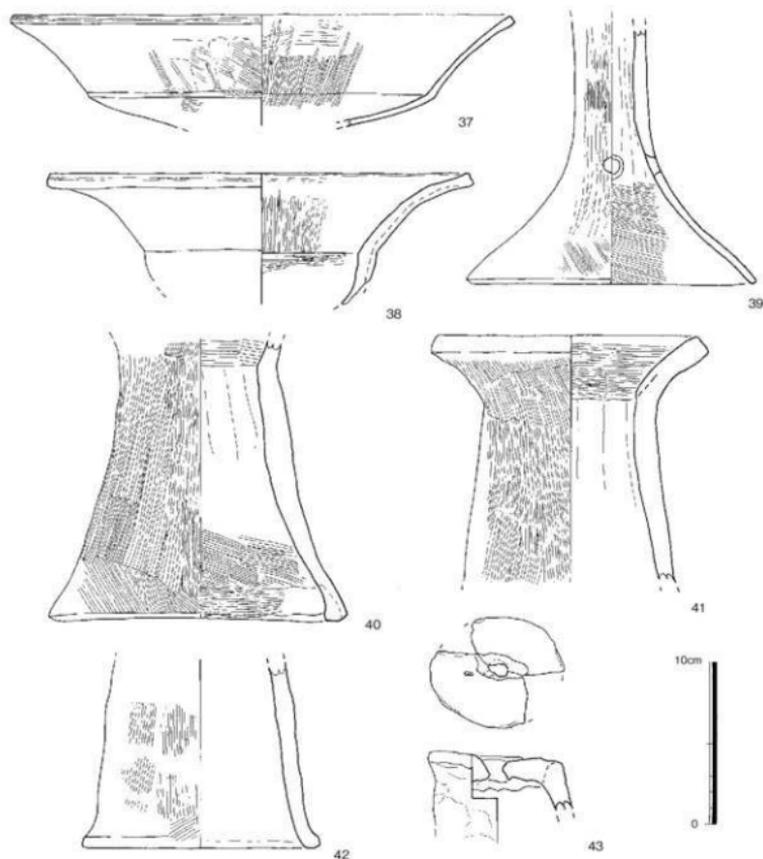


図9 SE045 出土遺物実測図4 (1/3)

29は口縁部を欠く。最大径部が胴部中央に位置する長胴のもので、底部はやや凸レンズ状を呈する。外面にタテハケメ、内面にヨコハケメの調整が認められる。30・31は小形の甕で、30は口径約16.8cmを測る。内面にはハケメ調整と指頭痕が残る。31は口径約15.6cmを測り、口縁部は直立している。外面にはハケメ調整と指頭痕跡が残る。32は脚付甕である。上半部は欠損している。脚部の底径は約16.5cmを測り、脚部には明瞭なハケメ痕跡が認められる。33・34は壺である。33は直口壺の口縁部で、口径約12cmを測る。内面にハケメ痕跡がみられる。34は袋状口縁壺である。口径約16.2cm、器高約24.0cmを測る。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ調整が認められる。

35は鉢で、口径約20.6cmを測る。外面に工具によるナデ、内面にハケメ調整がみられる。36は脚付鉢である。口径約22.0cm、器高約10.2cm、底径約6.0cmを測る。37～39は高坏である。37は復元口径30.6cmを測り、外面にハケメとミガキ、内面に細かなミガキがみられる。38は外面にわずかに丹塗の痕跡が認められる。39は脚部の外面でハケメ後にミガキの調整が施されている。直径約1cmの透かし孔が2カ所穿たれている。40～42は器台である。40・41の外面にはハケメ調整の痕跡が明瞭にみられる。42の底部外面には黒斑が認められる。43は杵形支脚で、胎土には白色粒を多く含む。

#### SE007 (図10・11)

調査区北側で検出した井戸である。東側は調査区外へと狭くため、全体の規模は不明確であるが、南北長約1.52mで、掘方の平面プランは楕円形を呈する。埋土の主体は暗褐色粘質土である。深さは約1.6mで、上面から約0.4m以下はほぼ垂直に掘り下げられている。器高約3.8mの底面付近で湧水した。遺物は輸入陶磁器を中心にパンケース約1/2箱分出土した。出土遺物の年代から、中世の井戸と推定される。

#### 出土遺物 (図11)

44は白磁碗の口縁部である。復元口径約18.1cmを測り、口縁端部は玉縁状を呈する。胎土には細かな黑色粒を含み、釉の色調は灰白色である。45は白磁皿で、口径は約9.8cmを測る。胎土と釉の色調はともに灰白色である。

#### SE 150 (図10・11)

調査区南西側で検出した井戸である。長軸約0.84m、短軸約0.8mを測り、掘方の平面プランは楕円形を呈する。埋土の主体は上層が暗褐色粘質土、下層が黑色粘質土である。深さは約1.5mで、ほぼ垂直に掘り下げられている。底面付近で湧水した。遺物は弥生土器を中心にパンケース1箱分が出土した。出土遺物の年代から弥生時代終末の井戸と推定される。

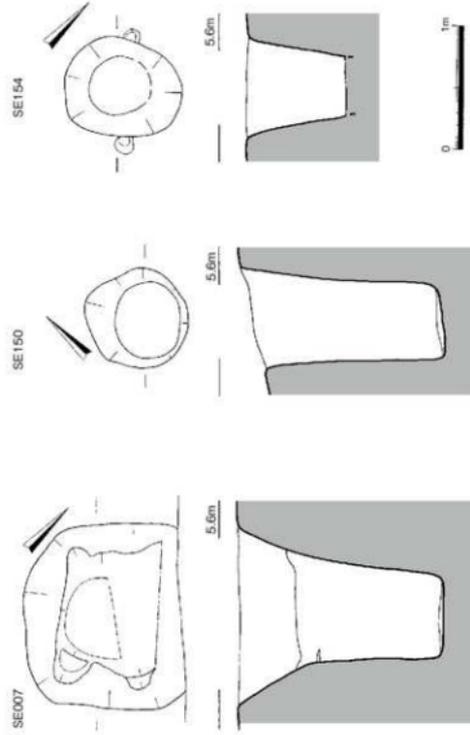


図10 SE007、150、154実測図(1/40)

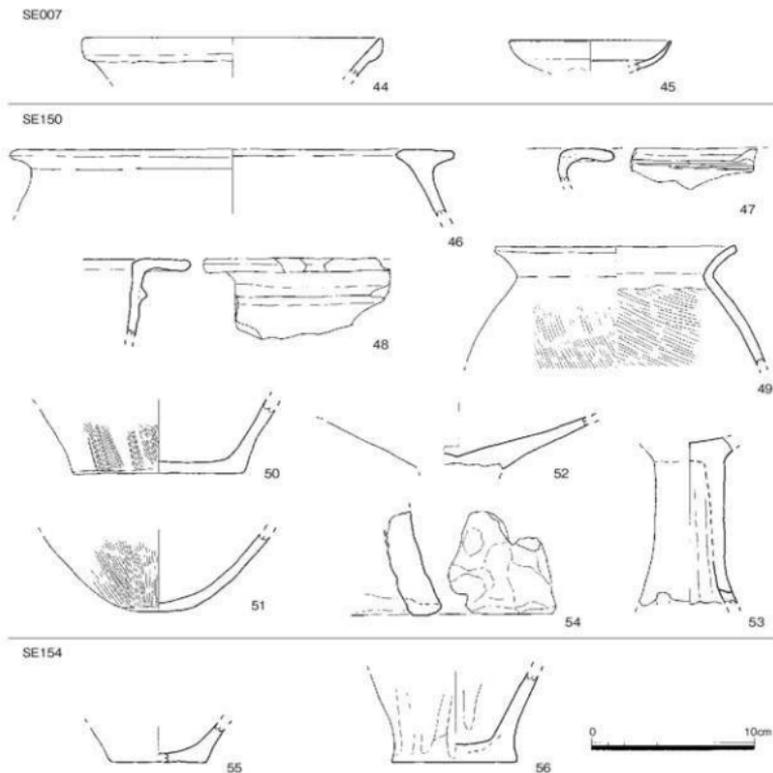


図 11 SE007、150、154 出土遺物実測図 (1/3)

#### 出土遺物 (図 11)

46～48は弥生土器の甕口縁部片である。46は復元口径約27.0cmを測る。48は頸部下に断面三角形の突帯を一条有する。49は中型甕である。復元口径は約14.6cmを測り、内外面にハケメ調整が認められる。50は平底を呈し、やや外湾しながら立ち上がる。51は壺の底部片で、外面にはハケメ痕跡がみられる。50・51の底部には黒斑が認められる。52・53は高坏である。53は脚部片で円形の透かし孔が一部残存している。54は支脚片とみられる。内外面にユビナデによる調整が認められる。

#### SE154 (図10・11)

調査区南側で検出された井戸である。SD089に切られており、SD089の最下面で検出された。掘方の東半が調査区外へと続いていたため、調査終了前に重機で拡張し、掘方の東側を検出した。調査の安全上、底面まで掘削できていない。長軸約0.96m、短軸約0.8mを測り、掘方の平面プランは楕円形を呈する。直径約15cmの円形ピットが掘方の南北端で検出された。遺物は弥生土器を中心

にバンケース1/3箱分出土した。出土遺物の年代から弥生時代中期の井戸と推定される。

#### 出土遺物 (図11)

55・56は弥生土器の底部片である。平底で、55は復元底径約5.6cm、56は復元底径約7.6cmを測る。56はやや外湾しながら立ち上がる。

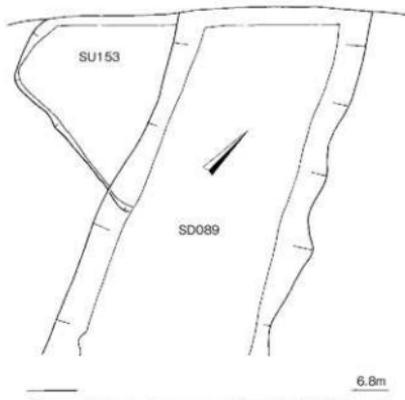
#### (4) 溝 (SD)

#### SD089 (図12・13)

調査区の中央を南北方向に横断する大溝である。南北ともに調査区外へと続いており、検出できた長さは約11.4m、幅は2.2～2.7mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは約0.9mである。底面にほぼ凹凸はない。埴土は上層が暗褐色粘質土、中層が黒褐色粘質土、下層が暗褐色粘質土である。黒褐色粘質土では中世の土器片が多く出土した。溝全体では弥生土器・土器器・須恵器・輸入陶磁器・黒曜石など多くの遺物が出土し、出土遺物の年代から中世の溝と推定される。

#### 出土遺物 (図13)

57～59は白磁碗である。57は口径15.7cm、器高5.1cmを測り、口縁部は玉縁状を呈する。胎土の色調は灰色、釉色は黄色がかった白色で、体部下半は露胎である。58の口縁端部はやや外反する。胎土の色調は淡灰色、釉色はややオリブ色を呈する。59は復元台径7.4cmを測る。見込みと畳付に各々2ヶ所目跡がある。胎土の色調は淡灰色、釉色は灰オリーブ色を呈する。60～62は白磁皿である。60は口径10.2cm、器高3.4cmを測る。胎土には細砂粒や黒色粒を含み、釉色はややオリブ



1層 ①に②の黄褐色粘砂質土 (Hac10YR5/4に②の黄褐色) ② 2～3mm大の底物を多く含む。砂質土が主体であるが、やや粘質のある褐色土も含む。

2層 褐色粘質土 (Hac10YR4/4) 1層に比べて砂質土の割合は多い。

#### 【SD089埋土】

3層 暗褐色粘質土 (Hac10YR3/4暗褐色)

1～5mm大の炭化物を多く含む。しまりあり。

4層 暗褐色粘質土 (Hac10YR3/3暗褐色)

3層に似るが、炭化物の混じりが少ない。

5層 黒褐色粘質土 (Hac10YR2/3暗褐色)

粘性がやや高い。細かな地山のブロック土を含む。

6層 暗褐色粘質土 (Hac10YR3/4暗褐色)

2～3mm大の地山ブロックが主体であるが、褐色の粘質土を少量含む。

#### 【SU153埋土】

7層 暗褐色粘質土 (Hac10YR3/3暗褐色)

細かな地山ブロックを少量含む。非常にしまりあり。

8層 暗褐色粘質土 (Hac10YR3/3暗褐色)

7～9層にかけての継層。しまりあり。

9層 褐色粘質土 (Hac10YR4/6暗褐色)

地山のブロック土と少量の黒色土で形成される。

10層 黒褐色粘質土 (Hac10YR2/3暗褐色)

黒色粘質土が主体であるが、2～5mm大の地山ブロック土を多く含む。非常に粘性あり。

図12 SD089、SU153 実測図および土層断面図 (1/60)

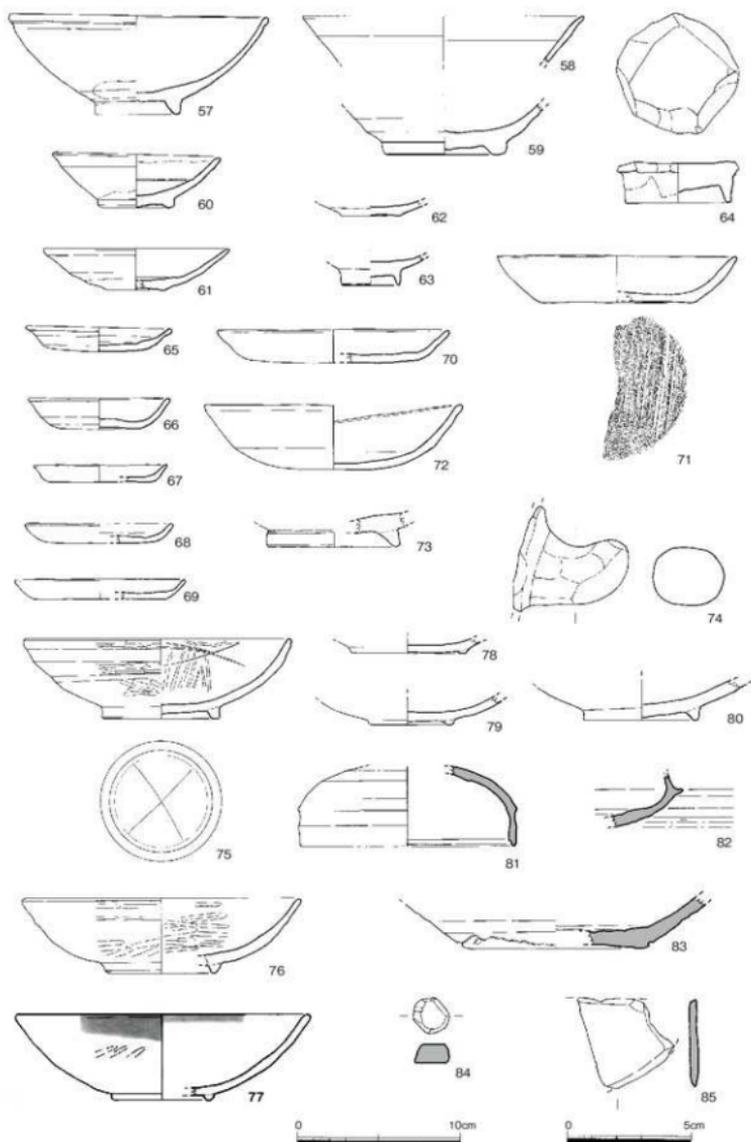


図13 SD089出土遺物実測図(1/3、85のみ1/2)

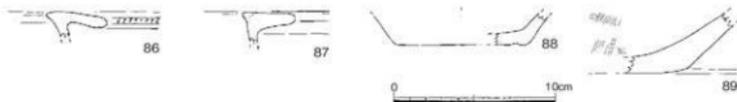


図14 SU153出土遺物実測図(1/3)

ブ色がかった灰色である。61は復元口径11.2cm、器高2.5cmを測る。見込みに目跡が1ヶ所認められる。62は底径3.6cmで、底部外面は露胎である。63は高台径3.6cmで、胎土に細砂粒や褐色粒を含む。釉色は黄色がかった灰白色である。64は白磁碗の高台で、見込み部分を打ち欠いた瓦玉とみられる。65～71は土師器の皿である。65は口径8.8cm、器高1.6cmで、底部には板状圧痕がある。66は口径8.6cm、器高4.6cm、底部には回転糸切の痕跡が認められる。67は摩擦しているが、68・69の底部には板状圧痕がみられる。70は口径14cm、器高2cm、71は口径14.4cm、器高9cmを測り、71の底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。72は土師器の坏で、全体の形状が歪である。73は土師器の碗で、高台径は8cmである。74は土師器の把手で、胎土には細砂粒と赤色粒を多く含む。75～80は瓦器碗である。75はほぼ完形で残存し、外面にミガキとヨコナデ、内面にミガキと調整の時の擦痕がみられる。高台には「×」の形状をした細い線刻が認められる。77の口縁部には重ね焼きの際についたとみられるススが認められ、80の畳付にはハケ状の痕跡がみられる。81は須恵器の坏蓋、82は坏身で、81の口径は13cmを測る。83は須恵質の鉢で、底部外面にはハケメ状の痕跡が認められる。84は滑石製の瓦玉である。直径約2.2cm、厚さ1.2cmを測る。85は片岩製の石庵丁片である。

#### SD029・SD038 (図2・18)

SD029とSD038は調査区の東側に位置する。南北方向にのびる溝で、SD029は幅30～50cm、深さ10～15cm、SD038は幅約30cm、深さ約3～5cmを測る。埋土はともに明褐色粘質土である。SD029では須恵器、土師器、弥生土器、直刃鎌、SD038では土師器、弥生土器などが出土したが、土器はいずれも小片である。SD089と平行に並んでいることから、SD089と同時期の溝である可能性が想定される。

#### SD046 (図2・18)

調査区の中央に位置し、東西方向にのびる溝である。東側はSC037、西側はSD089に切られる。幅約20cm、深さは約12cmで、埋土の主体は黒褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器などの土器小片と滑石製小玉1点、ガラス製小玉1点などである。出土遺物の年代から弥生時代の溝と推定される。

#### (5) 貯蔵穴遺構 (SU)

##### SU153 (図12・14)

調査区の中央北端で検出された遺構である。北側は調査区外へと続き、東半はSD089に大きく削平される。深さは約0.9mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は上層が暗褐色粘質土、中層が褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土となり、底面付近に堆積する黒褐色粘質土は非常に粘性がある。遺構の性格は不明確であるが、遺構の残存状態から推測される掘方の規模としては貯蔵穴のような大型の遺構であった可能性が想定される。遺物は弥生土器を中心にバンケース1/2箱分出土した。出土遺物の年代から弥生時代中期頃の遺構と推定される。

##### 出土遺物 (図14)

86・87は甕の口縁部片である。86は部分的に丹塗の痕跡がみられ、口縁には浅い刻み目が施されている。87の口縁はL字状を呈し、胎土に砂粒や赤色粒を含む。88は甕の底部片で、平底を呈する。復元底径は約8cmを測る。89は甕の底部片とみられ、底面は凸レンズ状にやや丸みを帯びると推定

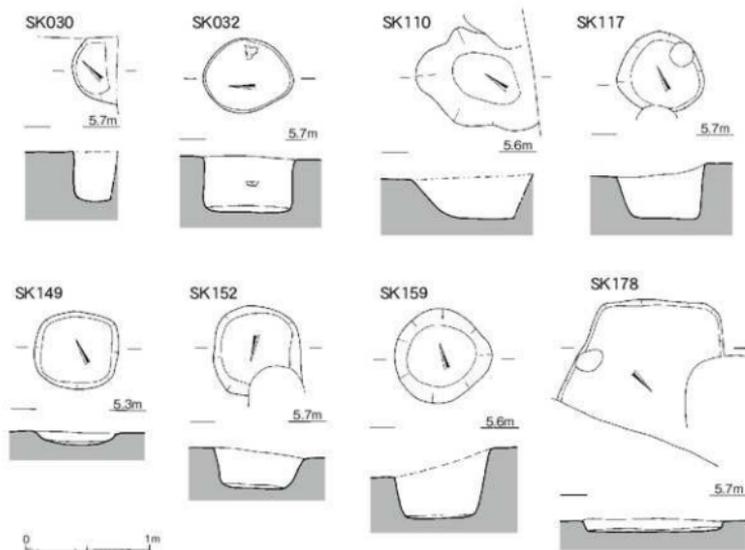


図15 SK030、032、110、117、149、152、159、178実測図(1/40)

される。内面には不明瞭であるがハケメ調整が残る。

## (6) 土坑 (SK)

### SK030 (図15・16)

調査区の南東端で検出された。調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。掘方の平面プランは円形を呈し、深さは約40cmを測る。出土遺物の年代から古墳時代の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図16)

90は高坏の脚部である。直径8mmの円形透かし孔が穿たれている。

### SK032 (図15・16)

調査区の南東側で検出された。短軸0.6m、長軸0.7mで掘方の平面はやや楕円形を呈し、深さは約45cmを測る。出土遺物の年代から古墳時代の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図16)

91は土師器の甕で、復元口径は約28cmを測る。外面にはヨコハケメ後、タキ調整が施されている。外面には一部黒斑が認められる。

### SK110 (図15・16)

調査区中央南側で検出された。掘方の南側は調査区外へと続き、深さは約35cmを測る。出土遺物の年代から弥生時代～古墳時代初頭の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図16)

92は弥生土器の甕口縁部で、内外面にヨコナデの痕跡がみられる。93は甕の底部で平底を呈する。

### SK117 (図15・16)

調査区中央北側で検出した。掘方の平面は直径約0.7mの円形を呈し、深さは約40cmを測る。出

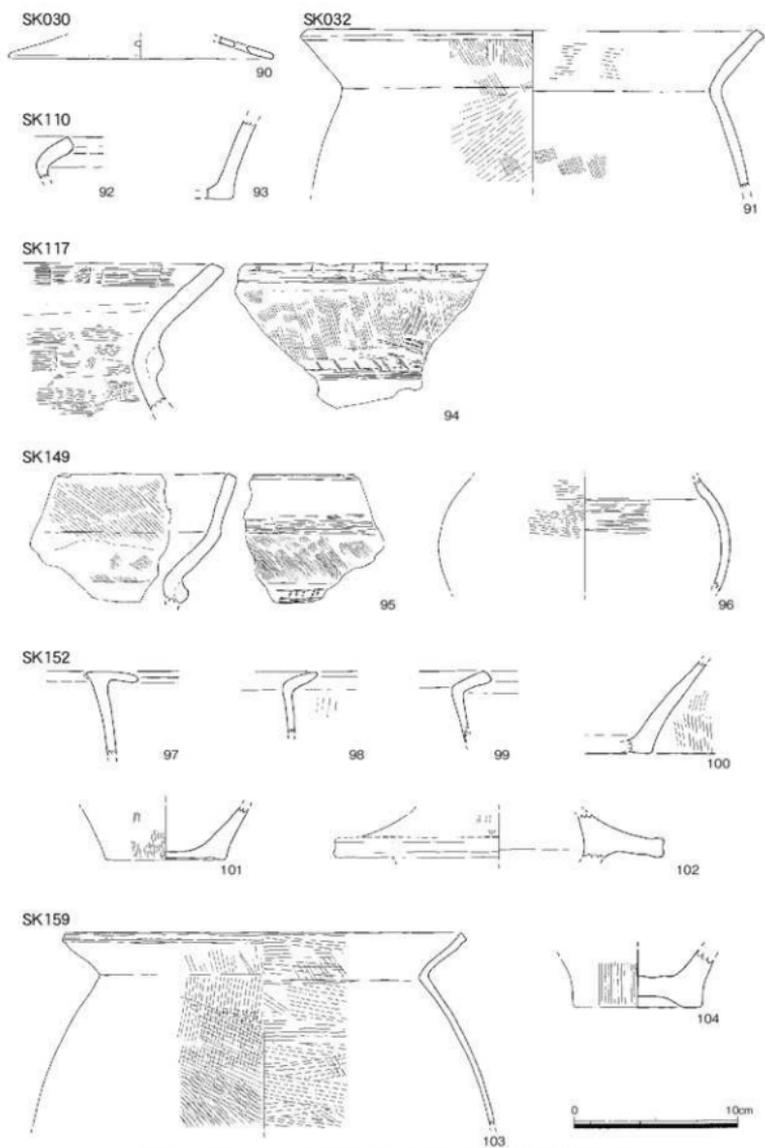


图16 SK030、032、110、117、149、152、159出土遗物实测图(1/3)

土遺物の年代から古墳時代の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図 16)

94は弥生土器の甕口縁部である。口縁端部と頸部の突帯に刻み目が施されている。内外面にハケメ調整がみられる。

#### SK149 (図 15・16)

調査区西側で検出した。掘方の平面は短軸0.6m、長軸0.7mの隅丸方形を呈する。深さは約10cmと浅い。出土遺物の年代から弥生時代後期の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図 16)

95は弥生土器の壺の口縁部である。頸部の突帯には刻み目が施される。96は壺の胴部片である。外面にはハケメ、内面上部にはヨコハケメ、頸部と下部にはナデ調整が認められる。

#### SK152 (図 15・16)

調査区の西側で検出された。掘方の平面は長さ約0.7mの隅丸方形を呈し、深さは約33cmを測る。出土遺物の年代から弥生時代後期～終末の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図 16)

97～99は弥生土器の甕口縁部である。97の口縁部はL字状を呈する。97・99は摩滅により調整は不明であるが、98の外面にはハケメ痕跡が不明瞭ながら認められる。100・101は甕の底部である。平底を呈し、外面にはハケメ調整が施される。102は大型器台片である。丹塗の痕跡がわずかに認められる。

#### SK159 (図 15・16)

調査区の西側で検出された。掘方の平面は直径約0.8mの円形を呈し、深さは約50cmを測る。出土遺物の年代から弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑と推定される。

#### 出土遺物 (図 16)

103は弥生土器の甕で、復元口径約24.6cmを測る。胎土には細砂粒と赤色粒を含み、器面の色調は褐色を呈する。内外面にハケメ調整が認められる。

#### SK178 (図 15)

調査区の西側で検出された。掘方はSD089や別の遺構に切られており、全体の規模は不明であるが、長さ約1mの方形を呈する。深さは約10cmと浅い。出土遺物は小片が多いが、土器の年代から弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑と推定される。

#### (7) その他出土遺物 (図 17～19)

105・106は土師器の皿で、105は口径約8.0cm、106は口径約9.0cmを測る。105はSP001、106はSP004出土。107は弥生土器の複合口縁壺の口縁部である。外面には黒斑が認められる。SP031出土。108は弥生土器の甕で、口径16.0cmを測る。SP040出土。109は弥生土器の甕底部である。平底を呈し、ハケメ痕跡が認められる。SP042出土。110は土師器の坏で、底径約7.0cmを測る。SP047出土。111は土製の投擲である。SP107出土。112・113は白磁碗で、ともにSP131出土。112の口径は15.6cmを測り、胎土の色調は灰白色、軸はオリブ黄色を呈する。113は胎土と軸の色調が灰白色を呈し、内外面に大きな貫入がみられる。114は須恵器の坏である。内面には円弧タタキとナデ調整がみられ、外面には「十」字形のヘラ記号が施される。SP151出土。115は弥生土器の器台である。口径約11cm、底径約11.6cm、器高約15.7cmを測る。上部はややくびれた後大きく開く。SX155出土。116は弥生土器の高坏で、器面の色調はにぶい橙色を呈する。SP200出土。117は土師器の小型壺である。口縁部はほぼ直口して立ち上がる。胴部内面にユビオサエ、外面

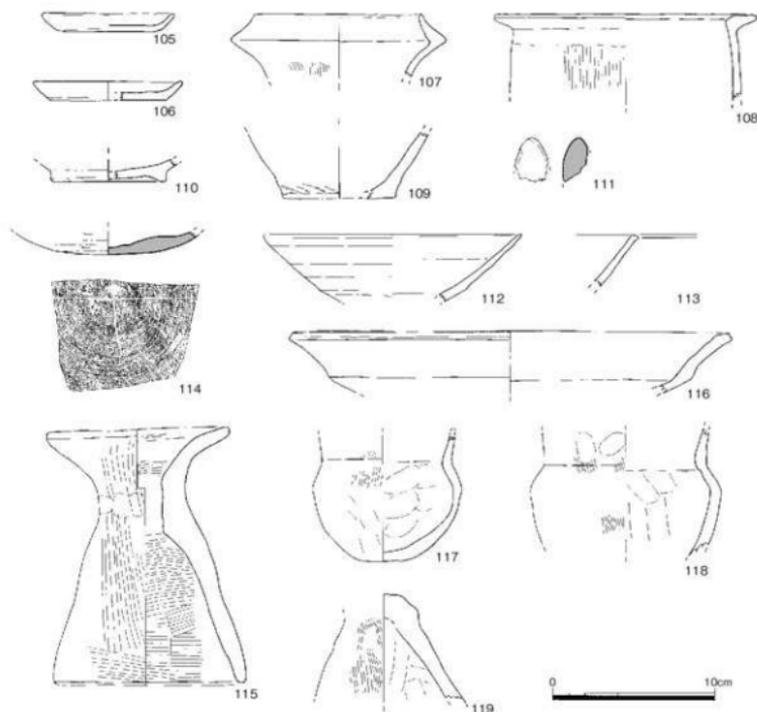


図17 その他出土遺物実測図1(1/3)

にハケメ調整が施される。118は土師器の壺で、胴部は肩が張った偏球体を呈する。胴部内面には工具による強いナデ、外面にはナデの調整が施され、一部にハケメ調整が残る。119は支脚片とみられる。胎土に粗・細砂粒を多く含む。内面には工具による強いナデ、外面にはやや雑なハケメ調整がみられる。117～119は調査区北西の落ちて出土。

120～124は滑石製の白玉である。120は直径約0.5cm、孔径約0.15cm、厚さ0.15～0.2cmを測る。SC033出土。121・123は小口がやや斜めに裁断されている。121はSE045、123はSC090出土。122は直径約0.7cm、孔径0.2cm、厚さ0.2cmを測る。円形に面取りされておらず、未製品の可能性がある。SD046出土。124は直径約0.55cm、孔径約0.2cm、厚さ0.4cmを測り、やや厚みがある。SP102出土。

125はガラス製小玉である。直径約0.4cm、孔径約0.15cm、厚さ0.2cmを測り、色調はターコイズブルー色を呈する。SD046出土。126は土製丸玉である。直径約0.8cm、孔径約0.2cm、厚さ約0.6cmを測る。外面の色調は黒褐色を呈する。調査区南側の遺構検出時に出土した。

127は鉄鏃である。全長約6.3cm、鏃身部幅は1.2cmを測り、鏃身は短く丸みを帯びる。SP061出土。

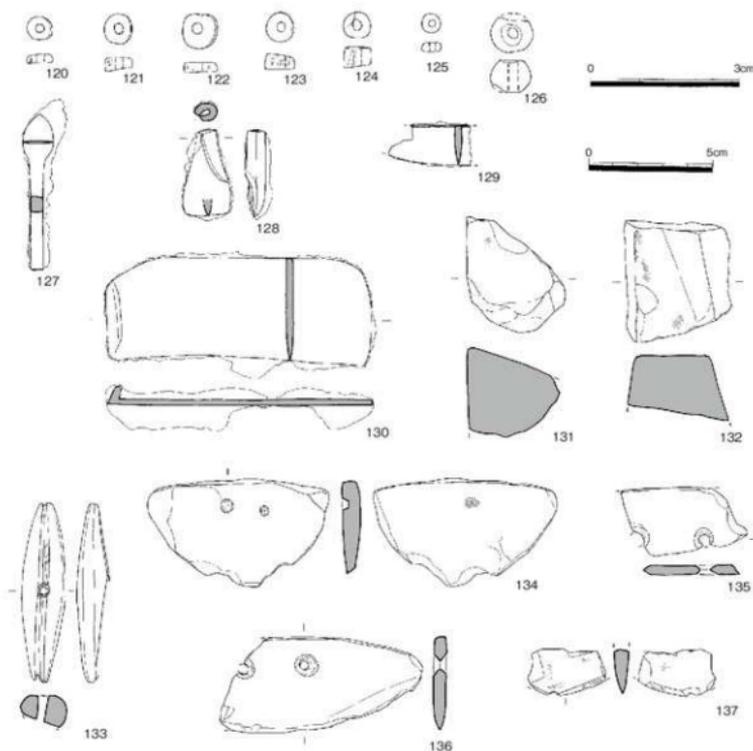


図18 その他出土遺物実測図2(1/2、120~126は1/1)

128は雛形鉄斧で、残存長約3.5cmを測る。上部の鉄板を打ち曲げ、袋部を形成している。SP122出土。129は刀子である。I区の遺構検出時に出土。130は直刀鎌である。長さ10.8cm、最大幅4.1cm、厚さ約0.3cmを測る。SD029出土。131・132は砂岩製の砥石である。131は上面と側面の一部、132は上面に研磨痕跡が認められる。131はSP086、132はSE150出土。133は石錘である。長さ約7.3cmを測り、中央に直径約0.5cmの穿孔が穿たれている。粘板岩製である。SK178出土。134~137は石庖丁である。134は表裏の穿孔が貫通しておらず、未製品とみられる。外湾刃半月形を呈し、裏面の穿孔痕跡から鉄錐を使用したと考えられる。弥生時代後期に属すると考えられる。緑色片岩製である。SE045出土。135も外湾刃半月形を呈する。砂岩製でSC183の床面上出土。136は杏仁形を呈し、表裏ともに細かな研磨痕跡が認められる。刃部には研ぎなおしの痕跡が認められる。輝緑凝灰岩製である。SP093出土。137は調査区南側の遺構検出時に出土。輝緑凝灰岩製である。

138・139は磨製石鏃である。ともに凹基式である。138は緑色凝灰岩製でSP107。139は脚部を

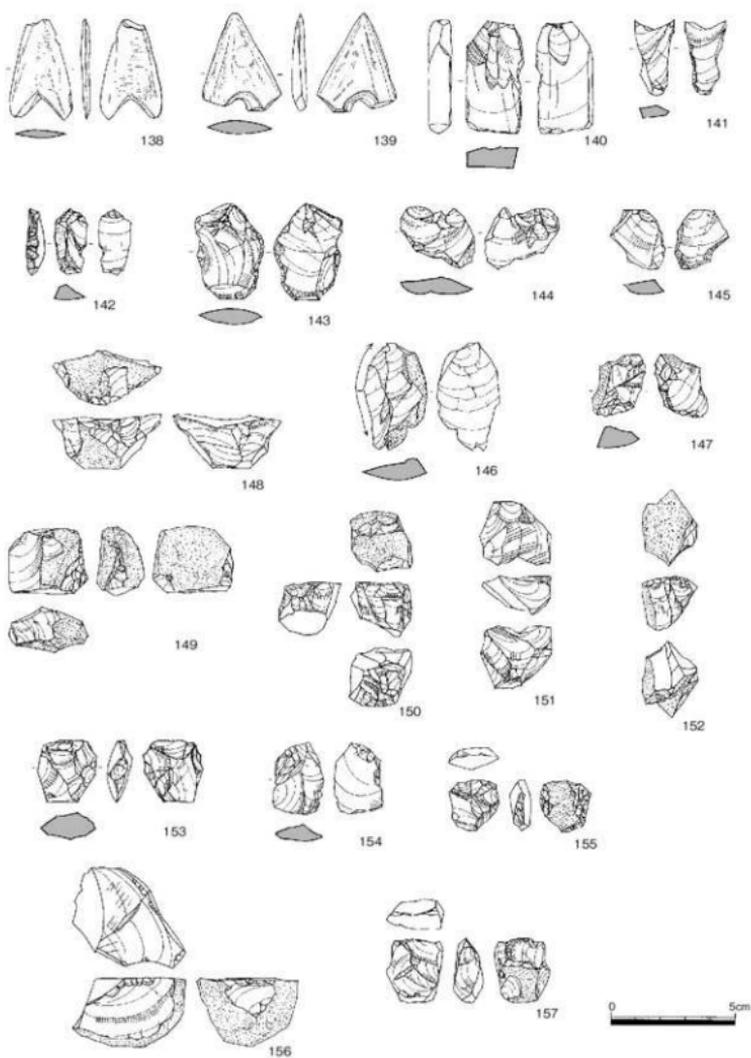


図19 その他出土遺物実測図3 (1/2)

欠損しており、厚みがあることから石庖丁ないしはその再加工品の可能性が高い。頁岩質砂岩製で調査区北側遺構検出時出土。140は小形の扁平片刃石斧の未製品である。頁岩製でSK115出土。141～143は黒曜石製スクレイパーである。141は腰岳産で一部に被熱の痕跡が認められる。SD038出土。142は調査区北側遺構検出時、143はSP144出土。144・145は黒曜石製RFである。144は調査区南側遺構検出時、145は腰岳産でSK152出土。146は黒曜石製UFである。全体的に摩滅している。SP107出土。147は腰岳産黒曜石剥片である。SK152出土。148～152は黒曜石製石核である。148は腰岳産でSC033、149は腰岳産でSC074、150は腰岳産でSC039、151はSC090、152は腰岳産でSC183出土。153は腰岳産黒曜石製楔型石器である。石核を転用している。154は黒曜石製UFである。両側面に微細な剥離痕がある。155～157は黒曜石製石核である。155・157には一部被熱痕跡が認められる。156は黒曜石製門礫の平坦打面である。153～157はSD089出土。

#### 4. おわりに

本調査地で検出した遺構は竪穴建物跡6軒、井戸4基、溝4条、土坑、ピットである。遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代初頭と中世前半の二時期に大きく分けられ、弥生時代後期～古墳時代初頭の主な遺構としては竪穴建物跡6軒と井戸3基が挙げられる。竪穴建物跡は調査区の東側に多く検出され、井戸は調査区中央～西側に検出された。調査区中央に位置するSE045では、中層付近で弥生土器がまとめて出土した(図5)。下層においては、甕や器台など完形に近い土器が底面付近で多く検出された。中層における土器の出土状況から、ある程度井戸が埋まった段階での一括廃棄か、あるいは祭祀が行われた可能性も考えられる。

中世前半の主な遺構は調査区の中央を南北方向に縦断する大溝1条のほか、それに並行する溝2条、井戸1基である。調査区の中央を横断する大溝は幅約2.5m、深さ約0.9mを測り、出土遺物の年代から11世紀後半～12世紀前半の時期と推定される。本調査地の西側に位置する第3次調査地では、12世紀代の遺構として波板状遺構と溝状遺構、井戸、土坑などが検出されており、溝状遺構のうち1条は道路状遺構として報告されている。比恵遺跡群第79次調査において検出された古代官道は9世紀初頭前後に一旦使用が停止し、11世紀中頃～14世紀代に再度道路として利用されたことが報告されていることから、3次調査で検出された波板状遺構や溝状遺構等に関して12世紀代の併行する



図20 SP001土器出土状況(南から)



図21 SD089土器出土状況(南から)

時期のもので、関連する遺構として取り上げられている。さらに北側に位置する6次・11次調査地においても古代末～中世初頭の遺構が検出されており、6次調査では井戸のほか、黒色土器碗や土師器皿を供献した土坑墓、道路の側溝と推定される溝がみつまっている。

1・2次調査地などの調査成果から、6世紀中頃～後半を中心とした短い時期に集落が営まれていたことがわかっているが、その後中世前半の段階で再び集落が営まれるようになり、中世の屋敷地が一带に広がっていたものとみられる。本調査地で検出された大溝についても同時期の集落における区画溝のような性格を有していた可能性が考えられるが、周囲の調査事例の増加によりその全貌が明らかになることを期待したい。

福岡市教育委員会編 2000「箱崎9・比恵裏館遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集 福岡市教育委員会

福岡市教育委員会編 2004「比恵35」福岡市埋蔵文化財調査報告書第821集 福岡市教育委員会

福岡市教育委員会編 2006「山王遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集 福岡市教育委員会

福岡市教育委員会編 2006「山王遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第879集 福岡市教育委員会

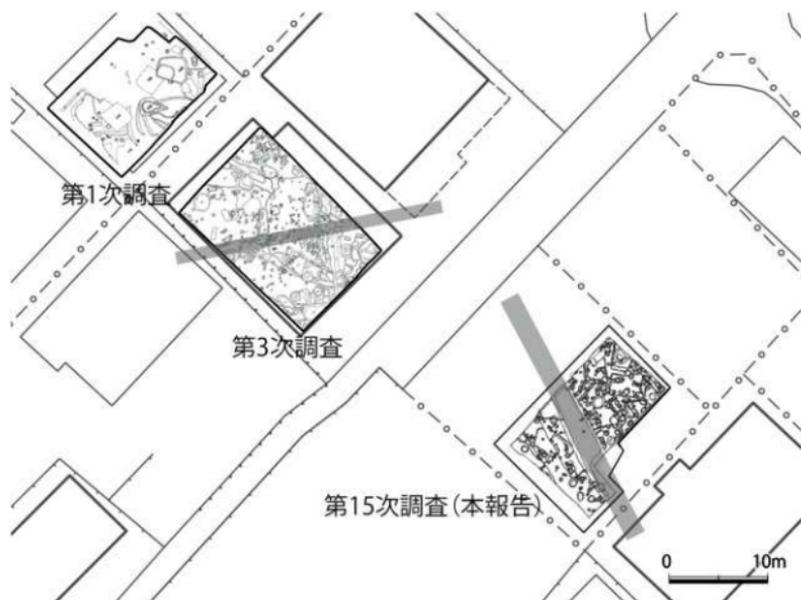


図 22 周辺の調査状況 (1/500)



1. I区全景写真（東から）



2. II区全景写真（東から）

1. SC037 (北から)



2. SE045 中層土器出土  
状況 (南から)



3. SE045 下層土器出土  
状況 (南から)





1. SE007 (南西から)



2. SE150 (南西から)



3. SE154 (南西から)



23



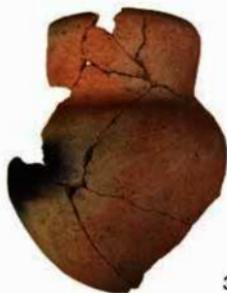
25



29



32



34



40



42



57



60



77

1 出土遺物 (縮尺不同)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	さんのういせき 12
書名	山王遺跡 12
副書名	山王遺跡第 14 次・第 15 次調査
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1300 集
編著者名	池田祐司・松崎友理
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
発行年月日	2020 年 3 月 25 日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号	(世界測地系)				
山王遺跡 14 次	博多区山王 2 丁目 18 番 5	40132	2379	33° 34' 14"	130° 26' 25"	20180507 ~ 20180621	158㎡	共同住宅 建設
山王遺跡 15 次	博多区山王 2 丁目 40 番 3、 40 番 4	40132	2379	33° 34' 46"	130° 26' 05"	20181015 ~ 20181226	125㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
山王遺跡 14 次	集落	旧石器、縄文時代、弥生時代前期・中・後期、古墳時代前期、中世	竪穴建物・貯蔵穴・土坑・ビット	ナイフ形石器、石鏃、弥生土器、土師器、磨製石斧、板状石製品、鉄器	方位を揃えた大型ビット
要約	<p>検出した遺構は竪穴建物 13 棟 + a、貯蔵穴 4 基、土坑、大型ビット等である。竪穴建物は 1 棟が平面円形を呈し他は方形である。弥生前期、後期、古墳時代前期のものと考えらる。大型の土坑からは弥生時代前末中初の小歯が正置で出土した。調査区の北東寄りには、60cm ほどの大型ビットが南北を軸にして並ぶ。</p> <p>出土遺物は小破片がほとんどで、弥生中期の須玖式土器片多く、後期から古墳初期の遺物が少量出土している。他にナイフ形石器、石鏃などの剥片石器、磨製石斧等、鉄製品、須恵器・土師器碗・白磁片が数点ずつ出土した。弥生時代前期から後期の集落跡で繰り返し住居が築かれている。大型のビットは倉庫または大型の建物が想定されるが復元することはできなかった。</p>				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
山王遺跡 15 次	集落	弥生・古墳・中世	竪穴建物・井戸・溝・貯蔵穴状遺構・土坑・ビット	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦器、石器、玉珎、鉄器	中世の大溝
要約	<p>検出した遺構は竪穴建物 6 棟 + a、井戸 4 基、溝 4 条、貯蔵穴状遺構 1 基、土坑、ビット等である。遺構の時期は中世前半と弥生時代後期～古墳時代初期の二時期に大きく分けられる。中世前半の主な遺構は調査区の中央を縦断する大溝 1 条のほか、それに並行する溝 2 条、井戸 1 基である。弥生時代後期～古墳時代初期の主な遺構は竪穴建物 6 軒と井戸 3 基である。建物跡は調査区の東側で多く検出された。いずれも全体の規模は把握できていないが、平面は方形を呈する。調査区中央の井戸は直径 1.3m を測り、弥生時代後期後半の土器がまともって検出された。</p> <p>遺物はコンテナケース約 20 箱の量が出土した。特筆すべき遺物としては古墳時代の直方鎌と雛形鉄斧、滑石製小玉が挙げられる。</p>				

## 山王遺跡12

山王遺跡第14次調査・第15次調査  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1390集

2020(令和2)年3月25日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 末松印刷株式会社  
〒812-0892 福岡市博多区東那珂2丁目4-36









